

---

# 逃亡者

シン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃亡者

### 【Zコード】

N1187Y

### 【作者名】

シン

### 【あらすじ】

泣き叫び、哀願し、媚び詫い……思いつくことは、何でもした。  
それでも、男は、笑つて、いた……。

一九八五年、華南経済圏繁栄の噂が広がり始めた中国、母親の死をきっかけに、四川省の農家から、二人の幼子が金持ちになることを夢見て、繁栄する華南経済圏の一省、福建省を目指す。一人の最

終目的地は、自由の国、<sup>アメリカ</sup>美國であつた。

一人は國龍<sup>グオロン</sup>、もう一人は水龍<sup>シュイロン</sup>、二人は、やつと八つになる幼子だ。

美国がどこにあるのか、福建省まで何千キロの道程があるのかも知らない二人は、途中に出会つた男に無事、福建省まで連れて行ってもらうが、その馬車代と、体の弱い水龍の薬代に、莫大な借金を背負うことになり、福州の置屋に売られる。

だが、計算はおろか、数の数え方も知らない一人の借金が減るはずもなく、二人は客を取らされる日を前に、逃亡を決意する。

しかし、それは適うことなく潰<sup>つい</sup>え、一人の長い別れの日となつた

…。

## run ? (前書き)

恋愛、という言葉が適切かどうかは判りませんが、お互いを求め続けた、という意味では、間違いないのではないかと思います。

夢を創るために逃げ出したのだ 女が夢を見る生き物なら、夢を創る男として……

母が薬を飲んでいるのを見た。

何故だかとても不安になり、胃の奥が、キュー、っと冷たくなるような心細さを感じた。

母が死んでしまうのではないか、と思つたのだ。

今考えれば、母が飲んでいた薬、というのは、医者がくれるようなものではなく、薬草を煎じた呪いのような薬であつたのだろうが、四川省の農村で、貧しい暮らしをしていた頃には、そんな知識さえ持つてはいなかつたのだ。

母は、所謂『離妓』と呼ばれる少女売春婦であり、まだ十代の頃に、出稼ぎ先であつた福建省で双子の兄弟を産み、その子供を四川省の実家に預け、年に数回、稼いだお金を持って、顔を見せに戻つて来ていた。

港のある福建省は、内陸部に位置する四川省とは違い、七〇年代からの改革開放によつて繁栄を約束された広州と同様、未来を望める土地であった。その繁栄を求めて四川を始めに、中国全土から人々が農地を捨てて、その繁栄の地に集まり始めていたのだ。

中でも、人々が福建省を選んだ理由は、そこにいれば、ある日、突然、『美国に行きたくないか?』と、制服姿の警官が現れて、<sup>アメ</sup><sub>リカ</sub>國行の船に乗せてくれる、といつ話が、まことしやかに噂になり始めていたからで、あつた。

海に面したその都は、未来を夢見る「」ことが出来る出発点だったのだ。

もちろん、四川省の農家に育ち、母親の帰りだけを待っていた幼い国龍と水龍には、それは単なる噂であり、決して手の届く場所にあるものでは、なかつたが。

だが、その年の秋、母が死んだ。

一九八五年。

二人がまだ八つの時である。

いつか見た、薬を飲む母の姿が、頭の中に蘇っていた。あの時感じた不安が現実となり、一人は互いを抱き締め合つて、泣いた。農家には男手が必要であるから、売られることはないと思つていたが、それは国龍に限つての安堵であり、体の弱い水龍に取つては、お金を持つて帰つて来てくれる母がいなくなつた今、すぐにも押し寄せて来る不安であつた。

熱を出す度にお金のかかる水龍が、貧しい農家の厄介者になることは、幼い子供でも容易に知り得たのだ。

「逃げよう、水龍。ここにいたら、離れ離れにされる」

母親の死を哀しむ間もなく、幼い二人が出した結論であつた。

「でも、行くところなんて……」

「<sup>マイグロ</sup>美国に行くんだ」

「……美国？」

「ああ。シホンシユギの夢の国だ、つて聞いたことがある」

「シホンシユギ……？　なに、それ？」

「そつ、それは……つ。えーと、シャカイシユギの反対だよ」

「シャカイシユギ……？　それ、なに？」

「だから……つ。この大陸のことなんだよつ。美国は、こじとはぜんぜん違うんだ。あつという間に金持ちになれるんだ」

「金持ち……。ホントに？」

「ああ。行きたいだろ？　もう熱を出したつて、だれにもイヤな顔されないんだ。美国じゃ、治らない病気なんて一つもないんだ」

「国龍が行くなら……行きたい」

「じゃあ、決まりだ。　行くぞ」

「え……？ 今から？ もう夜だよ」

「明日になつたら、おまえはどこかへ売られるかも知れないんだぜ。

それでもいいのか？」

「……やだ。国龍といつしょに行きたい」

「なら急ぐんだ。歩けなくなつたら、オレに言つんだぞ。おぶつてやるからな」

「うん」

双子、といつても性格は全く違つていた。多分、体が弱かつた水龍を、国龍が守る、という形がいつの間にか出来上がつていたためであつただろう。

そして、国龍は、今まで自分一人で水龍を守つて来た、と思い込んでいた。確かに、水龍が寝込んだ時、薬を飲ませてやつたり、食事をさせてやつたりするのは国龍の仕事だつたが、その薬代も食事代も、決して国龍が稼いでいた訳ではないのだ。

だが、水龍を売る、という話は、まだ母親が生きていた頃から持ち上がつていた話であり、その母親がいなくなつた今、すぐにも実行されて不思議ではない話であった。

実際、女の子しかいない家では、跡継ぎを作るために、男の子を欲しがつていたのだ。多少体が弱くとも、跡継ぎさえ作れればいいと。

たいていの場合、男の子は家業を継ぐために、婿養子に出されることなどなかつたから、水龍のような体の弱い子供でも、女の子しかしない家庭には、血を絶やさないために必要だつたのだ。

そして、貧しい内陸部では、子供を捨てたり、売つたりすることは、珍しくなも、なかつた。

今まで水龍が捨てられたり売られたりせずに済んでいたのは、母親が金を持って帰つて来てくれていたからであり、国龍が水龍の分まで働いていたから、だつただろう。

あまりにも無謀な、そして、あまりにも懸命な、ハつの幼子たちの逃避行は、その日の夜に、始まつた……。

「ねエ、国龍。美國、つてどこにあるのかなあ？」

田畠の合間を進む中、水龍が大きな瞳を持ち上げた。

「そ、そんなもん、決まってるだろつ。船に乗つて行くんだから、海の向こう側だよ」

「海……。海つてどんなのかなあ」

「魚がいっぱい、いるんだよ」

「じゃあ、船に乗つても食べるものに困らないねつ」

「ああ、もちろんさ」

黄色い大地の広大さも知らない頃の、会話であった。

社会主義の巨大な大陸がどれほどの国土を有しているのか、海というものがどれほどの広さを持っているのか、幼い一人に解るはづも、なかつた。ただ互いに離れたくない一心だつたのだ。

村の人々の噂だけを頼りに、広州や福州に出稼ぎに行つている人々の土産話だけを頼りに、ただ夢だけを抱いて歩いていた。

祖父母や伯母夫婦、親戚たちが、もつと二人を心配して探し回つてくれていれば、或いは、二人はずつと一緒にいられたのかも、知れない。

だが、そとはならなかつたのだから、今更そんな仮定を持ち出したところで、どうにもならないだろう。

畑仕事の手が減るのは困る、という理由だけで もちろん、貧しい農家ではそれはとても重要なことなのだが、親戚一同は、人手を割いてまで、二人の行方を追おうとはしなかつたのだ。もちろん、腹が空けば戻つて来る、行く当てがなくて戻つて来る、ということも、念頭にあつたに違ひない。

二人の逃避行を妨害するものは、差し当たつて何もなかつた。いや、あつた。

国龍が心配していた通り、夜の内には、もう、水龍が歩けなくな

つっていた。ハアハア、と荒く息をつき、ぐつたりと国龍の肩に凭れ掛かつて来たのだ。

「ほり、背中に乗れよ。おぶつてやるから」

そう言つて水龍をおぶり、歩き出したものの、国龍も、そう遠くまで歩けるほど、体力を持つていた訳では、なかつた。畠から家までおぶつて行くのは違つのだ。

まだ互いに、たつた八つの幼子であつた。

そして、歩いても歩いても、田指す海が見えて来ることは、全くなかつた。

秋草の露も、小さな足を辛くするだけのものだつたのだ。

その日の夜は、何もない草の上で、眠りについた。

「……さむい

「待つてろよ」

上着を脱ぎ、国龍は、体を縮める水龍の肩にかけてやつた。そして、自分もその上着の中に潜り込み、ぴったりとくっついて、寄り添つた。

「こうしていれば、さむくないだろ?」

「うん」

いつも、そうしていたのだ。寒い冬の口も、そうして眠れば、体はすぐに暖まつた。

その日もまた、同じであった。

多分、不安もなかつた。

もちろん、二人には、後どれくらい歩けばいいのかも、何日こうして過ごせばいいのかも、全く解つてはいなかつたが、それでもまだ、それが不安の要因になることはなかつたのだ。

まだ一日目であり、一人の胸には、夢と希望だけが存在していた。船に乗つてアメリカへ行けば、全て変わる。そう信じて疑つてはいなかつた。

一日田も、夢を見ていれば幸せだった。

だが、二日田は。

「おなかが空いたよ、国龍……。もう歩けない……」

「歩けない？ おまえはちつとも歩いてないじゃないか！ いつだつてオレがおぶつてやつて……。オレの方がよっぽどおなかが空いて、疲れてるんだ！」

まだ子供、だつたのだ。

いつまでも弱い水龍のことばかり気遣つてやれるほど、国龍は“出来た人間”では、なかつた。疲れて、おなかが空いて、足が痛くて、頼れる人間がどこにもいなくて、苛立ちばかりが募つていたのだ。

「だつて……歩けなくなつたら、おぶつてやる、つて……。国龍がそう言つたから……」

「おまえを可哀想だと思つたからだろつ！ おまえなんか連れて来るんじやなかつた。オレはあの家にいても良かつたんだ。おまえと違つて仕事もできるし、売られる心配もなかつたんだ。オレは、おまえが可哀想だと思つたから、連れて来てやつたんだ！」

多分、誰もが予測していたことだつたかも、知れない。ハつの子供に、相手の気持ちを考えてやれ、という方が無理なのだ。まだ自分のことさえ、自分一人では持て余す、非力な存在でしかなかつたのだから。

「歩けないなら、おまえはここにいろよ。オレは一人で行くからな」国龍は、ふんつ、と鼻を鳴らして、歩き始めた。もちろん、水龍が後からついて来る、と信じて歩き出したのだ。

多分、一人で生きて行けないのは、水龍だけでなく、国龍も同じだった。いや、むしろ国龍の方が、一人になることに奮えていた、と言つてもいい。水龍がいてこそ、国龍は強い人間でいられたのだ。

母が薬を飲む姿を見て不安になつたように、国龍に取つて、自分一人取り残されることは、何よりも恐ろしいことであつた。苦しげな呼吸が後からついて来るのを感じて、国龍は、その時も、安堵していたのだ。

「……つたく。しようがねーな。来いよ。おぶつてやるから。食べ物は、夜になつたら何か持つて来てやるぞ」

面倒臭げに言いながらも、水龍が自分がいなければ生きて行けないのだ、ということを確認した気分になつて、国龍はとても満足していた。

疲れた時に頼られても腹が立つが、全く頼られないと、もっと腹が立つのだ。

「ごめんね、国龍」

その言葉だけで、また歩いて行くことが、出来た。  
そして、悪いことでも何でも、出来るようになつていた……。

四川省は中国の内陸部であり、中国最大の重化学都市たる重慶や、四川省の省都たる成都を除けば、ほとんどが農村である。

今でこそ、成都には多くの外資系企業や、台湾、香港企業が企業

活動の認可を受け、活発に活動しているが、それでも、農家は貧しいままであった。

幼い一人が逃げ出した頃は、さうに。

広東省から重慶までが三〇〇〇キロというなら、四川省の農村部から福建省までは、さらに長い道程があつただろう。子供の足では、辿り着くことなど出来ない距離だったのだ。

それでも一人が辿り着くことが出来たのは、大人の助けがあったからである。

「こら、そこで何をしているんだ！」

牛の糞の臭いを我慢して、暖かさを求めて小屋へ入るうとした時、そう言つて一人を怒鳴りつけた人物が、それであった。

聞けば、その人物は村には必ずいるという『業者』の一人で、福州や広州の間を行き来している、という。

国龍と水龍が、福州から美國へ行きたいのだ、と言つと、小柄なその男は、マジマジと二人の顔を眺めて、こう言つた。

「フン……つ。子供にしてはきれいな顔立ちだな。女の子なら、もつと良かつたんだが。福州へ行きたいのなら、わしが連れて行つてやうう！」

その日から、二人は辛い思いをして歩く必要も、進むべき方向に迷うことなくなつた。決して快適とは言えなかつたが、馬車の荷台に乗つていれば良かつたのだ。

もちろん、水龍は馬車酔いして吐いたり、熱を出したりも、した。馬車が止まってからも、まだ体が揺れているような気がして、体中が痛くなつたりも、した。

「もう熱冷ましの薬がないんだから、これ以上、熱を出すなよ」

無理なことは解つていたが、国龍が言うと、水龍は、コクリ、とうなづいた。

だが、やはり熱を出した。

その時も、小柄な男は、親切に水龍のために薬を調達してくれたのだ。もちろん、そのお金は、福建に着いたら、働いて返すことにな

なっていた。

七〇年代からの改革開放で、沿岸地方は、内陸部の農家の何倍も金が稼げる、ということだったのだ。

「やさしい人だね、あのおじさん

「……」

水龍の言葉に、国龍は何故かうなづくことが出来なかつた。

多分、性格もあつたのだろう。国龍は水龍のように人懐っこくもなく、他人とすぐに打ち解けるような人間ではなかつたのだ。

それは、小さい頃から（今でも小さいが）、人に頼り続けて来た水龍と、面倒を見てやる側だった国龍の違い、だつたかも知れない。時には、母親に逢いたい、と言つて泣く水龍を宥めたり　また、国龍も一緒に泣いたりも、した。

母親が死んだ、ということは解つていても、もういなくなつた、ということが信じられずにいたのだ。

そして、福建へ着けば、何故か、母親に逢えるのではないか、といふような気さえ、していた。もちろん、そんなことはあり得ないことなのだが……。

古くから対岸貿易港として発展した福州は、福建省の省都であり、漢代の紀元前二〇二年に？越王が都と定め、唐代には、福州府が置かれた古都である。

アヘン戦争の後に開港された五港の内の一つでもあり、日本とも縁が深い。

もちろん、そんなことは、幼い一人の兄弟には、何の関係もないことであつたが。

「海だよっ、国龍。海が見える！」

馬車から指を差してはしゃぐ水龍の言葉に、豪快な笑いを飛ばしたのは、小柄な男であつた。

「ハツハツ！ あれは河だよ。ミン江だ」

福州は、この福建省最大のミン江河口に存在しているのだ。

「やーい、水龍のバーかつ。河と海を間違えてやんの」

「国龍だつて知らなかつたくせに！」

「オ、オレは知つてたさ」

その街はあるで、異國のようであつた。

天高く聳える白い白塔バイタと、黒い鳥塔ウータは、さながら世界を見下ろすことが出来る神の位置であるかのように一人を見下ろし、見たこともない大きな建物は、もう開いた口も塞がらないくらい、ドキドとする何かをもたらしてくれた。

港がある、ということは、いつの世も街に繁栄をもたらしてくれるものであつたのだろう。

だが、二人が連れて行かれたのは、「ノリノリ」とした薄暗い雰囲気の、掃き溜めのような一角であった。

おまけに、人々の話す言葉さえ、ほとんど聞き取れない状況になつていた。

巨大な中国大陸では、地方によつて、話す言葉が違うのだ。四川

で育つた二人に取つて、福建人の話す<sup>ひんなん</sup>南語（福建語）は、異国の言葉に等しかつた。

もちろん、幼い子供であつた分、大人のよつに、田舎の言葉を恥ずかしい、と思うことはなかつた。

二人をここまで連れて來た小柄な男は、四川訛りの残る？南語で、何やら別の男と話をしていた。時々、国龍と水龍の方を垣間見たりしている。

「あの人気が美國に連れて行つてくれるのかなあ？」

小柄な男と話をする、もう一人の男を見て、水龍が言つた。大柄で、二人を連れて來てくれた男とは、全く対照的な体躯をしている。「すぐに美國に行ける訳がないだろつ。おまえの薬代とか、馬車代を返さなきやならないんだ」

「あ、そーか」

呑氣な一人の会話を傍らに、男たちの交渉は続いていた。

「女の子ならいくらでも買ひ手はあるが、男の子じゃあなア……」

歪んだドアの前に立つ大柄な男が、顎に手を当てて渋つてみせた。

「あれだけきれいな子なら、欲しがる奴もいるだろう？」

小柄な男が、また、二人の方を垣間見る。

「まだ小さ過ぎるさ。うちは、九つになつてからでないと売らないんだよ」

「じきに九つになるさ。見かけは小さいが、一人とも、もうハつだ」

「……仕方がないな。　おい、坊主、こっちへ来てみる」

男の呼び声と手招きに、二人は顔を見合せながら、トコトコと歪んだドアの前へと足を向けた。

男が一人の背丈まで身を屈め、国龍から順番に、顎に指を掛けて、じろじろと顔を眺め始める。

「……なるほど。汚れてはいるが、きれいな子だ」

「それほどでもお……」

と、照れながら、国龍。

人に褒められることは、嬉しいものである。

「ハクシュンっ！」

それは、水龍のクシャミであった。しかも、男がマジマジと顔を眺めている時だつたから、タイミングが悪い。

「水龍のバカっ！ 鼻水がおじさんの顔についたじゃないかつ。あーあ、鼻クソまで 。クシャミへりこ我慢しinよつ」

「だつて……」

「あーっ、もう、汚いやつだなっ」

などと言しながら、国龍は、鼻水よりも汚いと思える服の袖で、男の顔をゴシゴシと拭いたりしている。それが、純粹な好意であつたことは、確かだらう。いつもの如く、手の掛かる水龍の面倒を見るように、怒られる前に気を遣つてやつたのだ。

「ごめんね、おじさん。こいつ、すぐ体をこわすから。オレ、ちゃんと二人分、働けるからさ」

男が沈黙だつたことは、言つまでもない。これ以上はない苦い顔で、ふるふると肩を震わせている。

ローン、と牛の糞の臭いをえ漂う服の袖口で顔を拭かれでは、それも当然のことだつただろう。

普通、服というものは柔らかい感触だが、その服はパシパシに強ばつていたりしたのだ。

小柄な男も、肩を揺らして、懸命に笑いを堪えている。

「……坊主、その服はいつから着てるんだ？」

やつと口を開いた男の言葉であつた。かなり怒りを抑えていると思える、低い声である。

それに、その男ももともと四川の人間なのか、二人には福建語を使うことはしなかつた。

同郷、血縁で繋がる中国人は、離れていても、その『地と血の繫がり』を持つてして、お互いの便宜を図り合つのだ。一人の男は、そういう地縁血縁で繋がっていたのだろう。

「えーと……。オレ、数のかぞえ方、わかんないし……」

少し照れながら、国龍は言つた。読み書き計算が出来ないことは、やはり子供でも恥ずかしいのだ。

もちろん、汚い服を着ているほうが、もつと恥ずかしい、という意見もある。

だが、そうして恥ずかしげに頬を染める国龍の姿は、誰が見ても可愛いものだつたに、違ひない。ただし、何日着ているか解らない服で顔を拭かれた男以外。

「なるほど。体だけでなく、頭の中にも虱しらみがわ蟻アリいていそうだな」「えーっ！ 耳から入つたのかな？ ゼンゼン気がつかなかつた」

「……」

絶句。

どうやら、男の方に返す言葉はないらしい。

福州に来て、有頂天になつていてる一人には、明るい未来しか見えていなかつたのだ。

「ぼく、草の上で寝てたとき、国龍の鼻の穴にアリが入つて行くの、見た」

「えーっ！ 何ですぐに言わないんだよ、このバカつ！」

「だつて……見てる間に入つてつたから・・・・・・」

「おまえはいつもそつやつて、ボー、っと見てるだけなんだよつ。グズつ。のろまつ」

「だつて、国龍がすぐにクシャミをしたから、アリはきつと飛ばされちゃつて。それに、国龍、ムリに起こしたらきげんが悪いし

」

「もういいっ！ おまえらの話を聞いてたら頭が痛くなる。さつさと中に入つて、風呂に入れてもらえつ」

疫病神に取り憑かれてしまつたかのような、男の叫びであつた。「おまえが鼻水をかけたりするから、怒られたんだぞ、水龍。仕事がなくなつたらどうするんだよつ」

「ちがうもんつ。国龍が汚い服で顔をふいたりするからだもんつ」最早、それだけの次元の問題ではないと思えるのだが、罪のなすり合ひは、子供同士のケンカでは、ごく一般的なものであつた。口だけなら、水龍も結構、気の強いところがあるのだ。この辺りは、さすがに双子と呼べるものであつただろう。

家中に入り、風呂場で洗濯物のようにゴシゴシと洗われた二人は、再び、大柄な男を前にしてゐた。

お世辞にも『きれい』とは呼べない一室で、のことである。

クモの巣の張つた天井と、黄色く染まつたカーテン、ヒビの入つた壁、奥にある鶏小屋から漂う独特の臭い、煙草の臭い、人間の臭い……それらが染み付き、暗く淀んだその部屋で一人が聞いた言葉は、借錢の金額で、あつた。

「……一千圓（元）？」

水龍の薬代と、ここまで馬車代は、一千元という途方もない金額になつていた。

その金額を、大柄な男は、あの小柄な男に立て替えて支払つた、といつのだ。

さらに、美国に行くには、その何十倍もの金がいる、といつ。数の数え方さえ解らない一人には、もう想像すらできない金額であつた。もちろん、最初の一千元という金額も、何度も説明を受け

なければ、解らなかつた。

「まあ、借金を返したら、渡航費用の一割を稼いで、残りはアメリカに着いてから返す」とになるだらうな

男はそう言<sup>い</sup>、

「おい、？？（婆婆）」のチビにも仕事を回してやつてくれよ」と、干からびた、いかにもじつづくババア、といった感じの老女に声をかける。

老女は、フン<sup>フ</sup>、と鼻を鳴らしだけであつた……。

一人の仕事は、着いたその日から、あつた。掃除や洗濯、食事の支度の手伝い、鶏の餌やり、小屋の掃除……やることは多かつたが、それでも農家での力仕事や、あちこち走り回る仕事に比べれば、随分、楽なような気がしていた。

一週間後に、「一人合わせて、七元のお金をもらつたが、それは、借金の返済と、ここでの食事代、洋服代に消え、手元には全く残らなかつた。

返済に回す稼ぎよりも、食事代や雑費の方が多くかかるのだ。数週間働いても、借金を返せる見通しはおろか、美國へ行くための金が溜まる見通しあえ、全く、つかなかつた。

そんな生活に不安を感じていた時、婆婆にこう言われたのだ。

「早く金を稼ぎたきや、客を取ることだね」

「……客?」

国龍も水龍も、その言葉の意味を知らない訳では、なかつた。置屋に売られる子供はたくさんいたし、ここも、その置屋の一つであつたのだ。

だが、それは、一人よりもっと大きな、それも女の子の話であり、男である彼らには関係のないことであつたはずなのだ。

「おまえたちのように、きれいな男の子と遊びたがる客もいるのさ。男の子は九つになるまで客は取らせないが、やりたいものを止めやしないよ」

「……」

やりたいのか、やりたくないのかは、国龍にはまだ、判らなかつた。いや、それで金が稼げるのなら、多分、やりたかった。ただ、それがどんなことであるのかまでは、解らなかつたのだ。客が、幼い子供とどうこう風に遊びたがっているのかが。

「ほく……ほく、やだ……。女人が泣いてたの、知つてる……。

男の人にいじめられて、たすけて、とか、ゆるして、とか言つてた

……

国龍の服の裾をつかんで、水龍が言つた。

その水龍の言葉を、心底楽しげに笑い飛ばしたのは、婆婆であった。

「ハツハツ！ 女は男に乗られて喜んでいるのさ。あんまり良くなつてね。おまえたちも、九つになつたら厭でも密を取なきゃならないんだから、それくらいは覚えておきな」と、歯の抜けた薄氣味悪い口で、ニヤリ、と言つ。

「……九つになつたら？」

「ああ、そうだ。たつぱりと稼いでもらわないとね」その婆婆の言葉に、水龍はすっかり脅えていた。密に苛められている女の声を聞けば、誰でもそつなるだらう。今にも死んでしまうそうなほどのか、苦しげな声を上げるのだ。

だが、国龍は。

「オレ……オレ、やつてもいい。金たくさんくれるのなら、明日から、やる」

「……国龍？」

目を瞠つたのは、水龍であつた。

「女人が、いじめられて泣いてたんだよ。ひどいことされたんだよ。それなのに」

「つぬさいなつ。どうせ九つになつたらやるんだから、こいつしょだろつ」

怖くなかった訳ではないのだ、国龍にしても。それでも、お金が欲しかつたし、何より、水龍の前で怖がつてゐるといふを見せるのは、小さなプライドが許さなかつた。

「ホウ。いい眼をした坊やだ」

もう引くことも、出来なかつた。

「オレ……やるけど、どうやつたらいいのかわからなーいし、どんなことするのかも・・・・・・」

「ただ密に言われた通りにしていればいいのさ。横になつて寝ていれば、すぐに済む」

「……」

その日の夜、国龍は、なかなか寝付くことが出来なかつた。水龍が眠つているのを確かめでは、婆婆のところへ「せっぱり、やめる」と言いに行こう、と何度も思つた。

だが、結局それは、出来なかつた。

今から思えば、幼い子供に無理やり密を取らせることが、自分の意志で密を取らせることの方が、よほど残酷なことであったに違ひない……。

「ほひ、いの子かい。きれいな子だ」

男の臭い息が、顔に、かかつた。

「さあ、服を脱いで、こっちにおいで」

嫌悪と恐怖、不安と強がりが入り交じる中、国龍は、言われるまに、服を脱いだ。今日のために着せてもらった、きれいな清代の中国服である。立て襟に紐ボタンのその服は、心地よい肌触りさえ備えている。

これから何が起きるのかは、こういう状況になつても、まだ一向に解つてはいなかつた。多分、女たちのように、体を舐め回されるのだろう、と思っていた。それくらいなら我慢できると思つていたのだ。それに、それだけのことでたくさんのお金がもらえるのなら、一日中、埃や鶏のフンに塗れて働くより、ずっと楽だと思つっていた。何より、どうせ九つになつたらしなくてはならないのなら、今から始めても同じだ、と思っていたのだ。

「子供はこれくらいの年が一番、愛らしい……。ナインナイ？」  
い子を見つけて来るものだ

男は匂いを嗅ぐようにしながら、幼い肌に顔を近づけ、自らの屹立した欲望を、取り出した。吐き気がするほどに醜い色と形をした、肉棒であった。先端は濡れ、餒えた匂いさえ、放つていて。

国龍はあからさまに顔を顰め、居心地の悪さを表すように、キヨロキヨロと部屋の中を見回した。　といって、何がある、という訳ではない。汚いベッドだけを置いた、狭い部屋なのだ。入り口にもドアではなく、腐った色の布だけが、掛かっている。

それは、どこかの部屋も同じであつた。

つい昨日まで、国龍も、その布の向こうから、水龍と一緒に、客を取る女の姿を覗いていたりしたのだ。あまりの声に、何か化け物でもいるのか、という恐ろしさと、好奇心のためであつた。

だが、いたのは、男と女。

男の尻の動きだけが滑稽で、水龍が女の悲鳴に脅えているのも構わず、国龍はわりと楽しんで眺めていた。

「この愛らしさ……」

男の手が、国龍の中心を弄り始めた。

国龍に取つては、たとえ自分のモノでも、愛らしい、という形容詞は思いつかないものである。

それでも、婆婆に言われた通り、おとなしくしていた。密も何も言わなかつたので、その場にずっと、突っ立つていた。

指が、少し強く、前後に動いた。

「……そんなことしたら、痛い」

そう言つと、

「ああ、まだ剥きはしないわ」

男はあつさりと手を放した。そして、こう呟いた。

「どうやら、本当に初めてのようだな。暴れもしない」

もちろん、国龍には、そんな男の言葉の意味など、解らなかつた。ベッドにうつ伏せにされても、もう指で弄られずに済む、とホッとしていたのだ。

だが、その次に起つたことには、体を緩めたまではいられなかつた。

実際には、何が起つたのか、解らなかつた。

体が裂けた、と思ったのが一つ。

そして、火で体を焼かれた、と思ったのが一つ。

それから、大量の爆竹を小さな穴の中に押し込まれた、と思ったのが一つ。

爆竹の火薬が、一気に炸裂したかのような、衝撃であつたのだ。

突然の凄まじいその痛みに、国龍は声すら上げることが出来なかつた。

それから、泣き叫び、哀願し、媚び諂ひ・・・・・思いつくことは、何でもした。

それでも、男は、笑つて、いた……。

その日、国龍は、もつて一度と密は取りたくない、と泣いて婆婆に懇願した……。

それから国龍は、何度もその日の夢に魘され、その内の何度かは、水龍の声で起こされた。

「国龍、国龍、だいじょうぶ？ また、あの夢？」

心配げな水龍の眼差しは、同時に途方もなく腹立たしいものでもあつた。自分がこんな思いをし、水龍が働けない時は、二人分の仕事をしているのに、という憤りのためだつたかも、知れない。

「さわるなよっ！」

そう言つて、水龍の手を振り払つたことも、あつた。

そして、ケンカになるのだ。

「あれは、国龍が自分でやる、って言つたんじゃないかっ。ぼくはやめた方がいい、って何度も言つたのにっ」

「おまえがいなけりや、あんなことはしなくて良かつたんだ！」

「そいやつて、国龍はいつもぼくのせいにばかりするんだっ」

「本当におまえのせいなんだから、当然だろ。おまえなんか、連れて来なけりや良かつた。さつさと売られちまえば良かつたんだよっ」

平氣で、お互いを傷つけるようなことも、言い合つた。

それでも、国龍にも、水龍にも、互いの存在だけが、心の拠り所であったのだ。同じ時に、同じ場所で生まれ、ずっと一緒に育ち、その互いの分身が、一番大切なものであつた。

双子の兄弟とは不思議なもので、多分、互いの存在は、母親よりも大切なものであつただろう。

「……」「めんね、国龍。ほく、ちゃんと働くから……」

「……」

「最近、ずっと熱も出ないし、これからも出ないと思つし。きっと、薬がいいんだと思つ」

「……薬？」

「うん。最初にここに来た口に、鼻水かけたおじさんに、もらつた。よく効く薬だから、つて」

「バカつ！ そんなもん受け取るから、借金がへらないんじゃなかつ。このマヌケ！ チビッ」

チビはお互い様である。

それに、借金が減らない理由は、きっとそれだけではなかつただらう。どんなに働こうと、計算が出来ない二人には、その差し引きさえ出来なかつたのだ。それに加えて、利子、という訳の解らないものまでついている。それが大きな原因であつたのだ。

そして、そうして絞り取られている人間が、ここには何人もいることも、一人には解らないことであつた。

結局、寒波が通り抜ける季節になつても、暖かい風が吹く頃になつても、二人の借金が片付く見込みは、全く、なかつた。

夏がくれば、九つになる そんな日も、もうすぐそこまで近づいていた。

あの日の痛みは、国龍にはもう思い出せなくなつていたが、それが凄まじい痛みであつたことは、夢を見るまでもなく、確かな恐怖として残つていた。

そのせいかどうかは判らないが、幼い日の記憶を、国龍は、水龍ほど鮮明に思い出すことが出来なくなつていた。

こんなことがあつたね、と言われても、そのことを覚えていないのだ。

「逃げよつ、国龍。ここから逃げよつ」

驚いたことに、そう言つて話を持ちかけて来たのは、普段、国龍に頼りつぱなしの、水龍の方であつた。もちろん、目の前に迫つた

“密を取られる日”に脅えていたのだろうが、いつも『国龍が行くのなら、ぼくも行く』『国龍がそうするのなら、ぼくもそうする』と言っていた水龍のものとは思えないほどに、大胆、且つ、不敵な言葉であった。

その日の内に、二人は逃げ出す決意を固めていた……。

「ガキが逃げ出したぞ！」

迷路のような暗い置屋の中を駆け抜ける中、そんな男たちの声が、すぐ後ろに迫っていた。

二人は鶏小屋を突つ切つて、裏の路地へと飛び出した。

バタバタバタ、ヒ鶏が派手に羽根を広げて暴れ回る。

「畜生！ このクソ鳥がっ！」

男たちの悪態が、耳に届いた。

だが、大人の脚力と腕力は、鶏くらいで怯むものではあり得なかつた。すぐに一人の背後へと距離を縮め、幼い子供たちを追い詰めた。

加えて、水龍がハアハアと息を切らし始める。

「はやく来い、水龍！」

国龍は、水龍の腕をつかんで、引っ張つた。

疲れていたところに手を引っ張られて、足が縛れたのだろう。

「あ」

水龍が見事につんのめつた。

ズザザ　　つ、と派手に地面を擦り、手足と頸を、存分に擦りむく。

もうそれまで、だつた。たとえ水龍が転ばなくとも、二人に逃げることなど出来なかつただろう。

「金も稼がず、逃げられるとでも思つていたのかい、坊主？　面倒をみてやつた恩も忘れて」

大きな手が、水龍の首根っこをつかみ取る。

猫を扱うような、仕草であつた。

「やめろお　　つ！　水龍を放せッ！」

国龍は男につかみ掛かつた。が、すぐに背後から、別の男に押さえ付けられる。

「放せつたらつ！ 水龍は体が弱いんだつ」

どれほど暴れようと、男の手が緩むことは、なかつた。それだけではなく、パシーン つ、と凄まじい平手を食らひつことになつた。

「くう つ！」

衝撃に顔が引きつた。痛みよりも、痺れの方が強かつた。

「付け上がるなよ、メスガキが」

「あ……つ……う……」「

「逃げようとするばどうなるか、たつぱりと教えてやうつじやないか。一度と逃げる気が起こらなくなるように、元にしな」

その日、一人は死ぬほど、殴られた……。

「 つたく。こんなに殴つちまつて。売り物にならなくなつちまうじやないか」

婆婆の小言はその日に始まつたことではなかつたが、包帯とガーゼだらけの一人を見てのその小言は、いつもより数段、苦々しいものであつた。

「最初にそれくらい叩き込んでおかなきや、ガキなんてもんは、いくらでも付け上がるがつちまつわ」

殴つた男の一人が、言つ。

「顔を殴るのはやめとくれ。じきに九つになるんだよ、この二人は「逃げなきや、殴りやしねえさ」

そんな会話は、意識も朦朧とした二人の耳には、届かなかつた。指一本動かすことも出来ないほどに痛め付けられ、全身、酷い熱を持つていたのだ。

その熱が引くまでに、数日、かかつた。

「ほら、口を開けるよ、水龍」

まだ起き上がるこどが出来ない水龍に、国龍は欠けた茶碗から、お粥をすくつて食べさせてやった。

湯気を立てるその粥は、熱のせいで余計に味のないものになつていたが、今さら文句をつけることも出来ない、いつもの食事である。水龍が、まだ腫れの残る口を開き、レンゲから流し込まれる粥を、嚥下する。

こんな生活で心が荒まない方が、どうかしていただろう。二人が笑う回数も、減っていた。子供らしくない冷めた瞳に変わっていた、と言つてもいい。

だが、まだ互いの存在があることで、心の一部は救われていたのだ。もし、これが一人で受けた傷なら、どうの昔に人間らしい心など失つていただろう。

ポタ、つと水龍の頬に、暖かい涙の零が、零れ落ちた。

「……泣いてるの、国龍？」

喋り辛い口で、問いかける。

「くやし……」

「え？」

「くやしくて……。オレ……こんなつもりじゃ……なかつたのに……」

「……」

「金持ちに……なりたい……・どんなことをしても、美国に……美國に、行きたい……」

まだ九つにもならない幼子が零した、悔し涙であった。

ポタポタと零れ落ちる涙の零は、正視していられないほどの痛ましさであった。

そして、そんな国龍の心は、水龍が一番よく知つていただろう。国龍はきっと、水龍にいいところを見せたくて、美国で金持ちになりたい、と思っていたはずなのだ。

run ?

「一緒にこじゅう、国龍……」

水龍は、傷の痛みも構わずに、体を起こして国龍の肩に抱きついた。

「……水龍？」

唇が触れ、重なった。

二人の、初めての、口づけ、であった。

それでも何故か、初めてではないような気がしていた。多分、まだ生まれる前からこじゅうしていたのだ。同じ卵の中で眠っていた時から そんな気が、した。

「もつとうまく逃げられる道を見つけなきゃね」

へへ、と頭を搔き、ポツ、と頬を染めて、水龍が言つた。

逞しさも子供の特権であつただろう。

「じゃあ、おまえはこれを食えつ。いっぱい走りなきゃならないんだからな」

国龍も、真っ赤な顔で、お粥を突き出す。

「え……ぼく、今日はもう……」

「食つんだっ」

半ば無理やり、水龍の口の中に、お粥を突っ込む。  
結果、水龍は 。

「あーっ！ 汚ねーなっ。吐くんじゃねーよつ  
「だつて……」

まだ胃が正常な働きをしていないのだ。

ありがた迷惑、というのも、子供にはありがちなことであった。せめて、水龍の胃の中に、あまり食べ物が入つていなかつたことだけでも、救いであつただろう。

元氣にしている国龍でさえ、頭から、顔から、腕から、体から、足から、どこも包帯とガーゼだらけなのだ。傷の数でいえば、先に

転んで動けなくなってしまった水龍よりも、暴れ回った国龍の方が、多かつたに違いない。

「……ねエ、国龍」

「ん？」

「もし……ぼくたちにも〃ヒーさん〃がいたら、もつとお金持ちだつたかも知れないね」

「ふんっ。かーちゃんが娼婦なんだから、そんなもんいるわけないだろつ」

「だから、もし、だよ……」

母親が娼婦であることは、大人たちの会話の中から、幼い子供たちの耳にも、訊くまでもなく入っていたのだ。もちろん、最初から娼婦の意味を知っていた訳ではないが、娼婦の子に父親はない、ということは、案外早くから知っていた。

父親が欲しい、と思つたことがない、といえば嘘になるが、それでも、兄弟二人でいれば、不安などなかつたのだ。

父親と一緒に暮らせる代わりに、一人が離れ離れにならなくてはならない、と言われたら、一人とも間違ひなく、互いの存在を選び取つていただろう。

「オレの毛布を使つてろよ。ゲロがついたの、洗つてくるからさ」

「うん」

毛布、と言えるほど暖かいものでなかつたにせよ、それは、この閉ざされた暗く狭い部屋の中で、唯一、互いの存在以外に、体を暖めてくれるものであつた。

もう夏も近いというのに、陽の差し込まない部屋は、一向に暖かさを含まなかつたのだ。この温暖な地にいてさえ。

一体、この部屋から笑いながら出て行つた人間は、何人いるのだろうか。この部屋で泣いた人間より少ないことは、確かであった・・・・・。

途端に蒸し暑くなり始めた夏の一日、傷の癒えた一人を待つていたのは、客を取る、といつ仕事であった。

否も応もない。

「もう九つなんだから、きつちり働いてもらわないとね」「という婆婆の言葉のままに、風呂場で洗われ、きれいな服を着せられた。

「水龍、おまえは『初めての子がいい』といつ客がいるから、そつちだよ。金もはずんでくれる。国龍、おまえも初めてだ、と言うんだ。値段が違うからね。なあに、おとなしくしてりやあ、判りやしない」

「いやだ……つ。今日からだ、なんて言わなかつたじやない

かつ。オレも水龍も」

「言つたら、また逃げ出しだらう?」

「

「この土壇場で殴られて傷物にされちゃあ、たまらないからね。さあ、この二人を連れておいき」

婆婆が言つと、団体の『テカイ男たちが、一人を驚捆みにする』にして、抱え込んだ。

「やだあ　つ！　たすけて、国龍！」

「水龍！　水龍を放せ！　水龍に出来っこないんだつ。あんなことされたら、水龍が死んじゅうじやないか！　水龍は体が弱いんだつ」先に連れて行かれる水龍を見て、国龍は男の腕の中で暴れ回った。今日ばかりは男も殴れないと見えて、手足を押さえ付けるだけに留めている。

「おねがいだよ、？？！　水龍はちよつとムリしただけで、熱を出  
ナイン  
すんだ。ムリし過ぎたら死ぬかも知れないんだ！」

「心配しなくとも、客は丁寧に扱ってくれるさ」

「うそだ！ そんなのうそだ！」

「煩い子だね！ とつと連れでお行き

「いやだあ っ！ 水龍！ 水龍！」

それほど叫んだ日は、後にも先にもなかつたに、違ひない。国龍  
にしても、水龍にしても。

そして、どんなに叫んだところで、結果は何も変わらなかつた。

国龍が連れて行かれた部屋は、初めての時より、ずっと豪華な部屋であった。ドアもあり、埃臭い匂いも漂つては、いない。ベッドも中国装飾のきれいなもので、右手にはシャワー・ルームさえ備えてあつた。

正面には、煙草を銜える背の高い男が立つていた。ここへ来る客には珍しく、形のいいダーク・スーツを身に纏つ、まだ若い、三十代半ばの男である。怜俐に整つた面貌をしていて、

だが、男に抱え込まれ、暴れ回る国龍には、そんなことなど何も見えてはいなかつた。

「随分、気の強そうな子供だ」

煙草を銜える男が言つた。

「え、ええ、まあ……。いらっしゃい、おとなしくしないかっ！」

「いやだあ つー 水龍！ 水龍！」

口から零れるのは、自らの片割れの名前だけであつた。

「 水龍？」

客が、その言葉を聞いて、眉を寄せる。

「ええ、じつこの弟の名前で……。そつちの方も今日が初めてで……」

「なるほど。それでは暴れるのも無理はないな

「すぐにおとなしくねますから」

男はそう言い、

「静かにしないかっ。美國へ行きたいんだろ！」

と、少し声を落として、国龍の耳元で咎め立てる。

「いやだあ つー 放せつ。放せつたらー。水龍が死んじゃうじやないか！」

「おまえが目の前にしている男は、台灣や美國、この福建の地下では知られた男だ。 解るか？ この福建から美國へ船を出していく

る堂口（組織）の人間だ。彼を怒らせたら、おまえは一生、美國行きの船には乗れなくなるぞ」

その言葉に、国龍はバタつかせていた手足を、ピタリ、と止めた。叫びを上げていた喉も閉ざし、目の前の客を、茫と見上げる。

「解るだろう？　この福州は、台灣から流れ込む資本で、繁栄が見込まれているんだ。彼らの動かすアングラ・マネーが北京を威圧し、地下資本が流れ込むのを黙認させている、と言つてもいい。彼らの力は、今に北京中央を越える。彼らがこの大陸を牛耳るんだ。おまえが美國へ行くための近道は、おとなしくしていることだ」

何という残酷な選択肢であつただろうか。わずか九つの子供に、本気でそんな選択をしろ、というのだろうか。弟を選ぶか、美國行きを選ぶか、どちらか一つにしろ、と。

男は、おとなしくなった国龍を降ろし、部屋の外へと出て行つた。口火を切つたのは、密であつた。煙草を潰し、国龍の前へと歩み寄る。

国龍は、ただきつい眼差しで、立つていた。

「そういう眼をした男を知つてゐる。大陸を出て、美國でのし上がつた男だ。戦うために生まれて来たような男、と言つてもいい。野心中に満ち溢れた、厳しい人間だ。　　美国へ行きたいか？」

唐突とも言える問いかけであつた。

国龍は、黙つて男を見据えていた。

心が揺らがなかつた、と言えば嘘になる。

だが、大人に嘘をつかれることには慣れ過ぎていたのだ。

「フッ。氣性も上等だな。あと足りないのは、頭だ。　　私はラルフ・リー。少し考えれば、この名前の使い方も解るだろう。運がよければ、ロサンゼルス洛杉磯で逢える」

言葉と共に、煙草の匂いのする手が、国龍の頬に、スウ、と伸びた。

その手を受け入れてしまえば良かつたのだろうか。

だが、国龍は、頬に触れようとするその手に、思いつきり口を開

いて噛み付いた。

「痛つ！」

呻きが上がったが、それでも離すことはしなかった。

横っ面を打たれ、ドアに叩きつけられるまで、ただ懸命に噛み付いていた。

強かに背を打ち、頭も少し茫としていたが、それでも、また噛み付いてやる積もりで、いた。

だが

。

「子供を打つたのは初めてだが……あまり氣分のいいものではないな。立てるか？」

何故、その男はそんな顔をするのだろうか。

何故、その男はそんな言葉をかけるのだろうか。

国龍は、ドアに叩きつけられた時の痛みも忘れて、その男を見上げていた。

それでも、大人を信じる」とは出来なかつた。

「さわるなつ！」

バシっ、と男の手を叩き落とし、ドアを開けて外に飛び出す。廊下の先には、見張りの男が立っていた。

当然、部屋から飛び出した国龍の姿も見咎められ、すぐに行く手を塞がれた。

背後から声がしたのは、その時だつた。

run ??

「おい、手当をしてくれ。怪我をした」

それは、ラルフ・リーと名乗った男の言葉であった。国龍に噛み付かれた手を持ち上げ、行く手を塞ぐ男に示している。

「こ、これは李先生（リセッシン）（ミスター）……。このガキが何か

「手当をしてくれ、と言つたんだ。私の怪我より、そんな子供の方が大切なのか？」

「い、いえ、そんなことは つ。すぐに手当を

男が薬箱を取りに、翻る。それを見て国龍は、ラルフ・リーと名乗つた男の方を、振り返つた。

どう見ても、見張りの男を追い払つてくれた、としか思えない状況だつたのだ。たとえ、まだ頭の足りない国龍でも、それくらいのことは察し得た。

ラルフと名乗つた男は、もう関心もないように、部屋の中へと引つ込んで行つた。それは、国龍が足を踏み出す切つ掛けでも、あつた。

国龍は、前を向き直つて、駆け出した。

その耳に、ラルフの咳きは、届かなかつた。

「美國行きよりも、弟の方が大切か……」

部屋に飛び込み、水龍を弄ぶ男にも噛み付き、大暴れをした国龍は、その日、また、男たちに死ぬほど殴られるハメになつていた。

水龍は、といえば、初めて客を取らされたショックに、半ば放心状態になつていたものの、その国龍の姿を前にして、ショックに浸つてゐる間もなく、何もかも忘れたように、懸命に国龍の看病を続けていた。やるべきことがあつたために、狂気に取り憑かれること

もなかつたのだろう。それは、何よりの救いであった。

「おかゆは？　おかゆ、食べれる、国龍？」

包帯とガーゼでぐるぐる巻きにされた国龍に、欠けた茶碗を示して、問いかける。

「……あの時の仕返しを……するつもりだら？」

「え？」

「今、食べたら……吐く……」

あれほど殴られた、というのに、国龍は遅しい言葉を口にした。いや、吐くという言葉が遅しいかどうかは疑問の残るところだが、体の傷に精神まで犯されまいとするその姿は、やはり、遅しいとしか言えないものであつただろう。

そして、涙が零れ落ちそうになるほどに、痛ましい……。

「どうしたら……頭よくなれる……のかな……」

「え？」

「まだ……頭にシラリ……蛆いてるかな、……」

「なにかあつたの、国龍？　頭、ヘンだよ」

「やつぱり……ヘンかな……」

「うん」

「オレ……頭よくなりたいな……」

熱に茫とする頭で、そんなことを呟き、国龍はいつの間にか眠りに導かれていた。

耳元では、心地よい水龍の声だけが聞こえていた……。

「……つたく。何て子だろ？　おぬしに怪我はさせぬが、反省はしないは、おまけに、またこんなに殴られちまつて。顔に傷がついたら、客も取れないんだよ」

今日も婆婆は苦々しい顔で、干からびた小言を吐き出した。

「国龍が悪いんじゃないんだ。国龍はぼくを助けようとして

。

だから、国龍を怒らないで、????「

水龍は、毛布に横たわる国龍の前に立ち塞がり、気丈な言葉で両手を広げた。恐らく、初めて国龍を守る、という立場に立つたことが、そんな健気な言葉を口に出させていたのだろう。これ以上、国龍に近づかせまい、とするように、小さな体で踏ん張っている。

「国龍は悪くない、だって？ ハツ！ 口に働けもしないクセに、偉そうなことを言つんじやないよ」

「働くから。ぼく、国龍の分まで働くから。だから、国龍に何もしないで」

何故、わずか九つの子供が、これほどまでに強くならなくてはならなかつたのだろうか。

もつと甘えて育つてもいい年だったのではないだろうか。彼らが甘えたところで、誰も咎めはしなかつただろ。う。

ここで泣いてしまつても、誰もみつともないとは思わなかつただうひ。

戦つているのだ。決してきれいことだけでは済まない戦争を、わずか九つの子供が始まつている。

もちろん、それが正しいとは、言わない。傍から見れば、意味のない無謀な戦争であつたかも、知れない。

それでも、それでも、彼らがそうして大人たちを睨みつけて生きていることを、馬鹿馬鹿しい、と一笑に付す人間にはなりたくない、と思わなかつただろうか……。

「いい心掛けだね。明日からはおとなしく客を取ることだ」

婆婆はそう言って、部屋の外へと消えて行つた。

薄汚れた布だけが、その名残を留めるように、揺れています。

国龍が口を開いたのは、その揺れが止まつてからのことであった。

run ??

「今夜だ……」

「え？ 田が醒めたの、国龍？」

不意のことに、水龍は、ひょこんと座つて、国龍の顔をのぞき込んだ。

「今夜……逃げるんだ……。ナナイナナイも男たちも……今日はきっと、油断してる……」

国龍の言葉は、確かにその通りであつただろ。怪我をして動けない国龍と、客を取ることに素直にうなずいた水龍が、今夜、逃げ出すとは誰も思つてもいはないはずなのだ。

だが

「ムリだよ。国龍、動けないじゃないか

水龍は言った。

いくら婆婆や男たちが油断していようと、動けない国龍と、体の弱い水龍が、逃げ切れるはずもないのだ。

「逃げるのは、おまえだ……」

「え？」

「おまえが逃げるんだ、水龍……」

国龍は、柔らかい眼差しで、水龍を見上げた。

頭を使つことを覚えた、最初の言葉であつたかも、知れない。

「……いやだ。国龍は熱があつて、頭がヘンになつてるんだ。めつたに熱なんか出さないから、よけいに」

「聞け。ラルフ……ルオシャンジャー洛杉磯のラルフ・リー……その名前を出せ

ば、美國行きの船に乗せてくれる堂口が、どこかにある……。港で訊けば判るかもしれない……。先に美國に行くんだ、水龍……。オレは、一人ならいつだって逃げ出せる……」

「……ぼくがジャマ？」

同じ卵から産まれた半身を、どうして邪魔だと思つことが出来る

だろうか。

「オレ……今、頭にシラミ蟻いてないと思ひ……。一人がいつべんに逃げたら、すぐに見つかるけど……オレがここにいれば、あいつら、すぐにおまえを探そうとはしない……。オレは後から行くから……。今日を逃したら、もう逃げられない……」

子供の成長がこれほど早いものであると知る人間が、果たして、何人いただろうか。昨年の秋まで無邪気なだけであった幼子が、數カ月後の夏には、もうこれほどまでに周りを見る眼を持つているのだ。もちろん、早く成長しなければならない状況であつたことも確かだろう。周りの人間が、彼らをいつまでも子供でいさせてくれなかつたこともあつただろう。それでも、国龍の成長の早さは、本来持つていた能力の覚醒であつた、とは言えないだらうか。

「泣くなよ、水龍……」

「国龍だつて泣いてるじゃないか……」

「おまえが泣くからだろ」

二人に取つては、これが初めての別れであつた。生まれる前からずっと一緒にいて、同じものだけを見て育つて来たのだ。

そして、今、初めて別々のものを見ようとしている。

いつかのように、二人はまた、唇を重ねた。

「……ぼくがちゃんと逃げられたら、国龍、安心して逃げられるよね？」

「ああ……。ラルフ・リーだ。忘れるなよ」

「うん……」

或いは、離れるべきではなかつたのかも、知れない。何があつても離れてはいけなかつたのかも、知れない。

それでも一人には、そうすることしか出来なかつたのだ。美國がどれほど遠い場所であるのかも、知らなかつた、のだから。心が引き裂かれるような痛みを、感じていた。

国龍も水龍も、体の半分を失うような思いだつた。涙は、何度拭つても、零れ落ちた。

「離れたくない……」

水龍の足も、なかなか動き出さうとはしなかった。

「美国で……いっしょに暮らす……。こんなところで暮らすのは

もうイヤだ……」

追い立てなくてはならない国龍も、辛かつた。

せめて、今夜一晩だけでも、互いの温もりを感じながら眠つていかつたのだ。国龍も、水龍も。たとえそれが、屈辱に塗れた生活に繋がるものであつても。今日を逃せば、もう逃げる機会はなくなつてしまふかも知れない、と解つても。

「オレ……畑から野菜、盗んだけど……もう、それをゆるしてもらえるくらいのこと……したよな……」

「国龍……」

「だから、神さまもきっと、味方してくれる……。やつ想ひだろ、

水龍？」

「……うん」

「熱出すなよ……」

「うん……」

「じゃあな」

国龍はそれだけを言つて、目を瞑つた。多分、そうしなければ、水龍も部屋から出て行くことが出来なかつただろう。そして、国龍も、水龍を引き留めてしまうかも、知れなかつた。

水龍は、なかなか部屋から出て行かなかつた。国龍がまた声をかけてくれるかも知れない、引き留めてくれるかも知れない、と思つて待つっていたのだ。

だが、国龍は目を開かず、水龍もしばらくして、立ち上がつた。何度も国龍の姿を振り返り、それからよづやく、部屋を出た。

お互い、喉が張り裂けるほどに、泣き叫んでしまいたい別れであった。

男たちにどれほど殴られても、こんな気分になりはしなかつたのだ。

「水……龍……」

その夜、水龍が捕まつた、といひ話は、国龍の耳には届かなかつた。

次の日、国龍は、婆婆や男たちから水龍の行方を問い合わせられたが、決して口を開くことはしなかつた。

婆婆や男たちも、国龍がここにいれば、水龍もすぐに戻つて来る、と思っていたのか、殴りつけてまで訊くことはしなかつた。もっとも、すでに殴られてボロボロになつてゐる国龍を殴つても、意味がなかつたせいもあるだろう。

そして、次の日も、その次の日も、そのまた次の日も、水龍がこの置屋へ戻つて来ることは、なかつた……。

「 つたく。あの気の弱い子が一人で逃げ出すなんてね。まだちつとも稼いでないっていうのに。 国龍、おまえは逃がしゃしないよ。あの子の分まで稼いでもらわなきやならないからね」  
熱が引き、やっと体を起しせるようになつた国龍を前に、婆婆はじうつくな顔で、そう言つた。

「オレは……水龍さえ逃げてくれれば、それでよかつたんだ」

「ハツ！ どうだか。そう言つた夜に逃げ出されちゃ、困るからね。おまえは鍵のある部屋に移つてもうりつよ、国龍」

「

「逃げる気がないんなら、一向に構わないだろ？」

まだ大人の狡賢さに対抗できるほどの力は持つていなかつたのだ、

国龍は。

多分、婆婆は、国龍のそんな心の内も、全て見透かしていたのだろう。

国龍は、その日の内に、鍵のある部屋に移された。窓もなければ、逃げ出せそうな隙間など何もない殺風景な空間である。多少、前の部屋より広さがあるとはいえ、一人になつた今、それは快適なものでも何でもなかつた。

二人なら、たとえ鍵のある部屋に移されても、何の不安にもならなかつたはずなのだ。

だが、今は 。

この部屋からどうやって逃げ出せ、というのだろうか。

あの男なら ラルフ・リーなら、その答えを知つていたのだろうか。

「水龍……オレ、逃げられないかも知んない……」

心細さと口惜しさの入り交じった咳き、であつた。

鍵はどうやっても外れず、ドアはどんなにぶつかっても壊れず、

話相手もいなくなり、逃げる算段も思いつかず、また、逃げようとして死ぬほど殴られ……そんな中、国龍が無氣力になつて行くにも、そう時間は掛からなかつた。

口を開くのも、客に体を貫かれた時の悲鳴だけに、なつていた。そして、いつしかそれも、忘れていた。

最初から、幼い子供が海を越えて美国に行く、など、無謀なことでしかなかつたのだ。四川から福建に辿り着けたことすら運が良く、普通ならどこかでのたれ死んでいたはずなのだ。いや、死んでいた方が良かつたのかも、知れない。その置屋で国龍が体中に塗りたくられた屈辱と痛みは、そう思わせるに充分なものであつた。

そして、逃げ出したはずの水龍の行方も、一向に国龍の耳に入ることは、なかつた。体の弱かつた水龍が、無事、船に乗ることが出来たのかも、長い海の上の生活に耐えられたのかも、閉じ込められたままの国龍には、知る由も、なかつた。

そんな中、国龍が死ぬことを考えずに生きていたのも、素直に客を取つっていたのも、全て、置屋に訪れる客から、水龍の噂を訊き出すためであつたのだ。そのためだけに客を取り、男たちの監視の中、屈辱に耐えて生きて来た。水龍だけが、国龍の心の抛り処だつただ。

だが、一年経つても、一年経つても、水龍の確かな噂は集まらず、水龍自身からの連絡も、ただの一度も入らなかつた。

そして、三年。

一九八九年、夏。

世界中を騒がせた六月四日の天安門事件の痛手もまだ生々しい中、多くの民主運動家が海外へと脱出を図つていた頃、それに合わせて、海外と本土を結ぶ人間の動きも活発になつていて。海外華僑からの手紙や物資を本土へ運ぶ、水客<sup>スイク</sup>、と呼ばれる人間である。彼らは、古くからその呼び名で呼ばれていたが、今では単なる運び屋としてだけではなく、その人脈と情報を利用して、大金を手に入れている者も珍しくはないようになつていた。

「よう、国龍。今日は確かな情報を持つて来てやつたぜ」

客の待つ部屋に入ると、真っ黒に日焼けしたその手の男が、欠けた歯を見せて、ニヤリ、と笑った。

「……期待させといで、また何も判らなかつた、つてんなら、サービスはしないぜ。寝てる間にさつさとやつて帰れよ」

十一歳になつた国龍は、冷めた眼差しで言葉を返し、ベッドにゴロリと横になつた。

「相変わらず、冷たい奴だな。ガキってえのは、もつと可愛いもんだぜ。まあ、そこがいいんだがな」

誰が可愛げのないガキにしたと言うのだろうか。欲に膨れた大人たちではないのか。

「……やつやと言えよ。オレ、毎日、窓のない蒸し暑い部屋に寝かされてるから、寝不足で眠たいんだ。相変わらず、ドアの鍵も開けてくれないしや」

「ああ、解ってるや。おまえの頼みなら何だつて聞いてやるや。おまえほど男をそぞる人間はいやしない」

「……」  
あれから、国龍が覚えたことといえば、自らの体を使って男を利⽤し、そこから情報を訊き出すことであった。自らの美しい容貌を認識し、それを最大限に使つことを覚えたのだ。

もちろん、覚えたことより、忘れたことの方が多い。笑い方も、泣き方も、その一つである。

男の指が下肢の狭間を弄るのを見て、国龍は黙つて目を瞑つた。  
「三年前の密航船の記事を、美国で集めていて、な」

男が言った。

「何しろ、向こうに渡つた奴でも、英語が出来る人間なんか、そういうやしないから、訊いて回つたところで、曰ぼしい話なんか出て来やしない」

「……それで？」

「向こうの沿岸警備艇に見つかずに上陸できた運の良い船に、おまえの弟が乗つていなかつたことはこの前に話した通りだが、警備艇に見つかって、上陸を拒否された密航船の中に、おまえの弟が乗つていたらしいと言うんだ」

「らしい、か。結構なことだな。そんな話を持つて来る奴はほんまんといふや。あんただけじゃない」

国龍は、もう何の期待も持たない口調で、ただ無気力に吐き捨てた。

実際、水龍らしき子供が船に乗っていた、ところ話は、山ほどあ

つたのだ。最初は国龍も期待し、情報を持つて来てくれた男に奉仕し、もうと詳しいことを調べて来てほしい、と頼んだが、結局、それ以上のことは、いつまで経ってもあやふやなままであった。

その内、国龍も気がついたのだ。男たちは、国龍に奉仕させるために、調べてもいことを、そもそもじく言つてみせていただけであったのだと。

「今度は本当さ。カリフォルニア半島沖を船行中に、美國沿岸警備艇に見つかった船があるんだ。中国人六〇〇人を乗せた三隻の船で、出港元はこの福建。密航者はチャーター機で強制送還されたんだが、その船に乗っていた一人が、おまえの弟のことを覚えていたんだよ」

「で、水龍は本土へ強制送還されて、その後の行方は判らない、つてか？ 每回、懲りもせずに、よくそんな話を持つて来るもんだな。少しは証拠でも持つて来たらどうだ？ そうしたらオレも信じて」

「真面目に聞けよ」

「……フンッ」

真面目に聞いていれば、今頃、絶望の最中にいたに違いない。

「おまえの弟は、あまり丈夫な体じやなかつただろう？ 船の中でも、容体のいい日なんか、ほとんどなかつたそうだ。まあ、何百人の人間が詰め込まれた、汚い船の中だからな。病気や疲労で死んで逝く人間は何人もいた。体が丈夫な奴でも、生きていられるかどうか判らない旅だからな」

「……何が言いたい？」

国龍は、男の言葉をきつく見据えた。

「もう弟のことは忘れる。おれがおまえの身請けをして、ここから出してやるから」

「触るなよ、ゲス！」

国龍は、男の手を振り払つた。

「オレの身請け？ ハツ！ あんたのものになるのなんかごめんだ、

と言つたはずだ

「国龍」

「帰れよー。金なら返してやるが。オレの密はあんただけじゃないんだ」

「……。いい加減、現実を見たらどうだ、国龍。もつ三年だ。その間、一度も連絡が入らないなんて、おかしいと思わないのか？普通なら、美国で働いて、おまえの元に金を送つて来ているはずだ。

「そうだろ？ おまえの弟は死んだんだよ。美国へ着く前に船の中で死んで、そのまま海に捨てられたんだ。だから、美国でも情報が手に入らな

「」

「帰れ！ 帰れよ！ あなたの言ひことなんか信じるもんかっ！ サツサと帰れよ！」

どの男たちも、似たような話を持つて來たのだ。

国龍の身請けをしたいがための偽り話だと。確証など何もない戯言だと。そう思つことで、国龍はその現実を受け入れまいとして來た。

だが、もう三年なのだ。

「帰れ……よ……。帰つてくれよ……。オレを抱きたいなん……抱かせてやるよ……。だから……サツサと抱いて帰れよ……」

離れなければ、よかつたのだ。

手放してはならない半身だつたのだ。

だが、あのまま水龍が男たちの餌食にされるのを、黙つて見ていることが出来た、というのだろうか。

その生活に、水龍が耐えられた、というのだろうか。

どちらの選択が正しかったのか、など、きっと誰にも判りはしない。どっちを選んでも、後悔しかなかつたかも知れないのだ。

『ぼくがちゃんと逃げられたら、国龍も安心して逃げられるよね まだ、やつと九つだつたのだ……。

「??、オレの借金、あとどれくらい残つてんだよ」  
客を取り始めて四年近く、今年、十三歳になろうとする国龍は、  
ソロバンを弾く婆婆を前に、ぞんざいな口調で問いかけた。いつ死  
んでもおかしくない老齢の婆婆であるにも拘わらず、全く死ぬ気配  
もなく、日々、金勘定に精を出しているのだ。

一九九〇年、春。

「そうだねえ……。おまえはよく稼いでくれるが、客とケンカをし  
ては治療費ばかり嵩かさむからねえ。今年に入つてからだけでも、客に  
いくら払つたか？」

「あとどれくらいだ、つて訊いてるんだよ」

のらりくらりと、いつも曖昧な言葉で逃げるのだ、婆婆は。

「なあに。おまえならすぐに返せる金額だ。客に怪我させなけ  
りやね」

「……」

「美國へ行くための金も稼ぎたいんだろ？ その器量だ。いくらで  
も稼げる。おまえほどの器量を持った人間は、どこにもいやしない  
からね」

「……水龍とオレは同じ顔だ」

「ん？ ああ、おまえの弟かい。可哀想にねえ。ずっとここにいれ  
ば良かつたものを、逃げ出したりするから行方知れずになるんだ」

「……。もうとっくにオレの借金の返済は終わってるはずだ。オレ  
はそれくらいは充分に稼いでる。客に払つた治療費も含めて。  
オレだって、いつまでも計算が出来ないバカなガキのままじやない  
んだ」

国龍は、威圧感すら備える眼差しで、婆婆を見据えた。

大人に騙されることには慣れているとはいえ、もう何の反抗も出  
来ない小さな子供ではないのだ。

だが。

「偉そうな口を叩くんじゃないよ。誰が今まで面倒をみて、大きくしてやつたと思ってるんだい。あたしがいなけりや、おまえだつてのたれ死んでたガキなんだ」

「で、一生、そいやつてオレから絞り取るのか?」

「計算よりも先に、口の利き方を覚えな。さあ、さつと部屋へお行き。客が待ってるんだ」

「……」

もう一生、ここから出ることは出来ないのだろうか。

何人もの男たちが見張りにつく中、国龍が逃げ出すことは不可能なのだろうか。

だが、逃げ出しへ行くところののだ。水龍の手掛けられ、掴めてはいないとこに……。

「へH。今日は上等な客かい? 借金が終わらないのが不思議なくらいだな」

ドアのついた、いい部屋の前に連れて来られ、国龍は、ピッタリと張り付く見張りの男たちに、皮肉を向けた。

「借金を済ませたければ、一度と客に手を上げないことだ」

「ハツ! 一回殴つただけで、三〇発は殴り返されてるわ。あんたらにもな

投げ付けるように言葉を放ち、乱暴にドアを開けて、中に入る。

ドアを閉じる凄まじい音も、今の心境を表すものであつたかも、知れない。

小されいに整えられた部屋の中には、サングラスを掛けた長身の男が立っていた。身につけているダーク・スーツも、いつもの客のものとはケタが違う。三十代の後半だらうか。そこいらのチンピラには持ち得ない、強かな雰囲気を備える男であつた。

「相変わらず、いい気性だな。もうとっくに廢人同然になつているかと思つていたが

「……え?」

「私を忘れたのか、坊主？」

煙草を挟む指が、サングラスを外した。

「あんた……」

忘れるはずもない顔であった。一度、国龍を見張りの手から逃がしてくれ、水龍の元へ行くのを助けてくれた男だ。 そう。名前も覚えている。

ラルフ・リー。

煙草の匂いも、幼い日に噛み付いた時と同じであった。

「水龍、という子供が私を頼つて船に乗つた、と聞いたんだが、一向に姿を見せなくてね。私も色々と手を使って探し回つてみたんだが、結局、見つからなかつた」

ラルフは、外したサングラスを胸のポケットに仕舞いながら、要點だけを簡単に告げた。多分、簡単にしか告げようのない言葉でもあつたのだろう。

「水龍は……生きてる。死んでなんかいない」

「なら、君はここで何をしている？」

「え……？」

「足りないのは頭だ、と教えてやつただれりへ。」

「……。ずっと、鍵のついた窓のない部屋に閉じ込められていたんだ。部屋から出られるのは、こつして客を取る時だけ……」

「客は、君を逃がしてくれようとはしなかつたか？」

「身請けをしたがる客は何人もいたさ。それを利用してここから出ることも出来た。だけど、結局、所有者が替わるだけなんだ。身請けをしてもうつても、回じよつに閉じ込められる」

「なるほど」

たつたそれだけの言葉であつた。納得しているのか、馬鹿にしているのかさえ、判らないような。

そして、国龍には、そんな男を前にして、敵意すら持つていらない自分が不思議だつた。以前に助けでもうつたことがあるとはいえ、国龍を助けようとしてくれた男など、何人もいたのだ。

「あんた……誰なんだよ？」

戸惑いのままに、国龍は訊いた。

「ただの客、という答えでは納得できないか？」

煙草の煙が、青く、昇る。

「……抱きたいのなら、さつさと抱けよ。ゲスな奴らはいつもそうだ。オレに舐めさせたいがために、そつやつてオレの知りたい言葉をもつたいつける。オレが舐めてやって、突っ込ませてやって、やつと口を開くのさ」

「……。そうだつたな。悪かつた」

「え……」

そんな言葉が返つて来るなど、誰が思つていただろうか。

「オレ、別に謝つてもらいたかった訳じゃ・・・・・・。客のあんたがオレに正直に話せなきやならない理由なんて、どうにも……」

国龍は、語氣を落として、口一もつた。

クックツ、と楽しげな笑みが、零れ落ちる。

それも何だか、不思議な気がした。その男が笑うなど、思いもないことだったのだ。しかも、そんな優しげな表情で。

「あんた……何でオレに名前を教えてくれたんだよ？ 何で水龍のことを探し回つてくれたんだ？ 何でまたオレに会いに来たんだ？」

胸に渦巻く疑問、であつた。

「……今、君が訊きたいことは、そんなことではないはずだろう？」

「え……？」

「他に訊きたいことはないのか？ 何よりも先に知りたいことは？ 新しい煙草に火を点けながらの、問いかけであつた。何よりも先に知りたいこと……。

「水龍は……水龍がどこにいるのか知りたい。だけど、オレはあんたほど頭がよくないんだ。頭のいいあんたに探せなかつたのに、オレにどうやって探すことが出来るんだ？」

「手を貸してやろう」

あつさりとした口調で、ラルフは言った。

「美國でのし上がれ。君の顔が全米で知られるようになれば、君の弟が君を見つける。そうでなくとも、誰かが君と同じ顔をした弟の存在に気づいてくれる。そのための手段なら、いくらでもある。世界中を騒がせる犯罪者になるもよし、その姿を利用するもよし

。一緒に来るか？」

「クリ、とうなづくまでに、そう時間が掛かる問いかけでは、なかつた。

その日の内に、国龍はラルフに身請けをされて、置屋を出た。ラルフが婆婆にいくら払つたのかは教えてもらえなかつたが、相当な金額であつたことは、間違ひなかつた……。

## 光の海。

確かに海と言えるものだつたのだ。上空から見下ろすロサンゼルスは、飛行機の速度さえ無視しているかのように、ほとんど位置を変えずに、そこにあつた。美しい、とか、凄い、とか思う前に、飛行機が上空で停止してしまつたのではないか、という錯覚さえ、覚えていた。

「あれ……何なんだ？」

始めて田にする大都会に、国龍は呆然と呟いた。飛行機に乗るのも初めてなら、そんな光の塊を見るのも始めてだつたのだ。

ここへ至るまでの恥は、台湾のホテルに泊まつた時から含めて、一通り何でも使い果たしていただため、そんな言葉しか出て来なかつたのかも、知れない。

「あれが」 A 洛杉磯だ

隣に座る、ラルフが言った。

「街が……光つてゐる……」

その言葉以上に、的確な言葉があつただろうつか。都市の中心部だけが輝いている訳ではなく、恐らく何十キロにも渡つて、光の海が続いているのだ。

「（こ）」、「A」は、アメリカの中でも特種な街だ。普通、都市には中心部というものがあつて、そこに企業や観光地、主要機関のほとんどが集中しているが、（こ）、「A」では、何十キロにも渡つて、それらが千々に散らばつている。たとえば、福州なら数キロ走れば農村部に行き当たるが、「A」は数十キロ走つても、まだ市内だ

「……」

言葉は何も、出て来なかつた。とんでもない街に来てしまつたのだ、と思っていた。初めて履かされた革靴の違和感さえ忘れてしまうよつな、そんな圧倒的な雰囲気だつたのだ。

鼓動が高鳴り、足がガクガクと震えていた。

飛行機が揺れた時は叫んでしまったが、今はそんな声すら出て来なかつた。

「君がしなくてはならないことは、まず言葉だ」

「言葉？ オレ、英語なら少し」

「君の英語など通用しない。それに、オレではなく、ぼくだ。汚い言葉や暴力で相手を威嚇しようとする人間など、所詮、取るに足らないクズだ。己に力があれば、言葉で相手を威嚇する必要もない。ぼくか、私。それが最低限の言葉遣いだ」

「……何だつてしてやるよ。それで水龍が見つかるのなら「ランディング飛行機が、光の海の中へと着陸する。

」」」から全てが始まるのだ。

空港から乗つた黒塗りの高級車は、パーム・ツリーの並木を横目に、目を瞠るような大邸宅へと滑り込んだ。

このホテルに泊まるのか、と国龍が訊いたことは、」」では触れないことにする。そんな大ボケを一々書いていては、話が前に進まなくなる。

だが、まるでお城だな、と言つたことは、その邸宅を表す言葉として、書き留めて置いてもいいだろう。

そこは、ラルフの自宅であつた。

そして、それを聞いた国龍がどんな顔をしたかは、言つまでもない。また、頭に風が蛆きかけていたのだ。

「ここが城？ ハッ。この街では、これを城とは呼ばないさ」

もつと凄い豪邸があるのだといふことも、いくつも豪邸を持つている人間がいるのだ、といふことも、国龍はその時、初めて、知つた。

それからも色々なことを覚え 覚えさせられ、知識と言わず、マナーと言わず、休む暇など全く、なかつた。

「私のことはラルフでいい。中国名は使っていない。そして、中国語も、屋敷を一步出れば、通用しない。君にも覚えてもらい易

い名前がいるな。郷に入つては郷に従え、という奴だ」

「話は一方的に続くことが多かつた。

「アレックスがいい。それなら、皆すぐに覚えるだろう」

「何かその名前に意味があるのか?」

「以前に飼っていた犬の名前だ。出来のいい犬で、使用人も皆、可

愛がつていた。君も、その犬くらいに賢くなってくれればいいんだ

が

「ムツ」

「気に入らないか?」

「当然だろつ」

「アレキサンダー大王と同じ名前だぞ」

「そんな奴、知らない」

「まあ、私も直接は知らないが……。話に出てくるほど偉大な人物  
だつたのか、ただの暴君だつたのか」

「なあさら、イヤだ」

「なら、ロンにしておけ。姓は韋<sup>ウエイ</sup>だつたな? ロン・ウェイで

いい。中国名はなかなか覚えてもらえないが、それならすぐに覚え  
てもらえる」

「龍<sup>ロウ</sup>……」

「君の弟も気がつくだろつ」

真面目なのか、不真面目なのか、人を食つたようなラルフの言葉  
と生活は、国龍に取つて、以外にも早く馴染めるものであった。

run ??

だが、ラルフが屋敷にいる時間は極端に短く 仕事を持つてゐるのだから当然のことなのが、国龍の教育は、十人を越える家庭教師と、屋敷の使用人で賄われることになった。

ラルフが何の仕事をしているのかは、解らない。以前に、堂口の要人である、というような話を置屋の男から聞かされたことがあつたが、ただのマフィアの構成員として片付けるには、立派な知識人である、という印象が強過ぎたのだ。

もちろん、それを使用人に訊いてみたことも、ある。

「旦那様ですか？ 旦那様は、ミスター・黄<sup>ホワイン</sup>の秘書をなさつておいでですよ」

と、丸々と太つたメイドは、応えてくれた。

「ミスター・黄？ 誰、それ？」

「ご存じないんですか？ このロサンゼルスのファー・イースト・ナショナル銀行の総裁で、大統領のブレーンをなさつていたこともある、黄中元様ですよ」

何だか、肩書きだけでも物凄い人物なのだ、ということは、国龍にも解つた。大統領といえば、このアメリカで一番、偉い人であり、その人のブレーンとして働いていただけでなく、自分の銀行まで持つていい、というのだ。

国龍はまだ銀行を利用したことはないが、そこが大変な金額のお金が動く場所である、ということは知つていた。

このアメリカで、そんな地位と金を持つているなど、まさに、海を越えてアメリカに渡つた中国人の夢、最高のサクセス・ストーリーではないか。

そして、そんな人物の秘書として働いているラルフに、国龍の相手をしている時間など微塵もないことは、容易に知り得た。

況してや、水龍の搜索に費やす時間など、全くと言つていいほど

なかつただろう。そんな中、四年間もかけて水龍の行方を捜し回ってくれ（見つからなかつたとはいえ）、福建の国龍の元にまで知らせに来ててくれたのだ。

だが、それは何故なのだろうか。

何故、ラルフはそれほどまでに、国龍や水龍のことを探して聞いてくれたのだろうか。

「やっぱり、オレの顔がいいからかな」

と、風の蝟いた頭で受け流せるほど、単純な疑問では、なかつた。

「ラルフは、オレ ぼくのこと、何か言つてた？」

その問いかけに、

「え、ええ、まあ……」

丸々と太ったメイドは、言ひにくそうに、口汚りやつた。

国龍が問い合わせると、

「あ、あの、気が遠くなるほど馬鹿な田舎者だから、理解できるまで何度も、何度も、教えてやつてくれ、と……」

いかにもラルフが言いそうな言葉である。

「教えてくれて、ありがとう」

どうやら完全に弄ばれているらしい。

国龍は爆発寸前にまで、憤慨した。否定できないことが、尚更、腹立たしい状況である。

「旦那様は、まだお若いですけど、とても立派な方ですよ。お忙しくて、家庭もお持ちになつていませんけど。その旦那様が、こんなに愛らしい坊っちゃんをお連れになるなんて……。ロン坊っちゃんがいらっしゃれば、旦那様もきっと、ゆつたりとした時間をお持ちになるようになりますよ」

「……あいつがゆつたりとした時間を持たないのは、忙しいからじやなくて、性格だと思つ」

国龍は、ボソリ、と呴いた。

「は？」

「あ、いや、別につ」

面倒をみてもらつて いる手前、悪口は言えない。いくらラルフが他人と好意的に付き合つて、週末にはパーティーを開くような人間でなくとも、悪口を言つてしまふほど、悪い人間でもない。と、国龍は一応、思つて いる。

時々、後ろからゲンコツで殴りたくなる時もあるが、それは軽々と躲され うなので、未だ実行したことは、ない。ちなみに、未遂はある。

だから、わりといい子で過ごして いたのだ。国龍にしてみれば。

run ??

「ラルフは？ 休日なのに、また仕事？」「ええ。今日も遅くなると言つておいででしたよ」

「そう……」

メイドの言葉に、国龍は落胆を表すよつて、肩を落とした。  
「…………明田は早くお帰りになるよう、私たちも頼んで差し上げますよ」

「……」

「ロン坊っちゃん？」

きつと、これほど切なげな国龍の表情を、メイドは見たことがなかつただろう。

だが、ラルフは見たことがあつたかも、知れない。台湾のホテルで、ラルフがシャワーを浴びている間に、国龍がラルフのサングラスを付け加えておけば、何十万もするサングラスを、弄つて壊してしまつた時、国龍は同じような表情をしていたのだ。

それと同じレベルになつてしまつことが、哀しい。

「大丈夫でござりますよ。旦那様もロン坊っちゃんのお相手が出来ないことは、心苦しく思つていらつしゃるんですから。少しくらいの無理は聞いてください」とも

「…………ホントに？」

「ええ、本當ですとも。 旦那様に何かご相談」とでも？

「クリ、とうなづき、国龍は手に持つ万年筆を持ち上げた。

「勉強してたら、インクが出なくなつて……」

「まあまあ、万年筆のインクくらいでしたら、私でもご用意して差し上げられますよ」

「違うんだ。インクが出なくなつて、思いつきり振つたら、インクが部屋に飛び散つて……。前に聞いたんだけど、部屋にある絨毯つて、ペルシャ絨毯だつて？ ぼく、値段まで聞いてなかつたから、

よく解らんだけど……高い?」

「……」

メイドが絶句したことば、言つまでもない。

そして、仕事から戻つて来たラルフが絶句したことば……。

「あのあ……」

「今度は何を壊したんだ?」

国龍の呼びかけに、ピクリ、とこめかみを引きつらせ、ラルフは言った。

国龍による被害総額は、すでに田畠を起しそうなほどになつているのだ。

ラルフが国龍の方を振り返ることが出来なかつたのも、仕方のないことであつただろう。控えめな国龍の口調は、次の言葉を容易に察し得させたのだ。

「さつき、庭の木に登つてたら」

「つかり足を滑らせて、庭にある彫刻を壊した、つてか?　だいたい、何だつて木に登つたりするんだ?　あの彫刻がいくらしたと思つてゐる?」

「……彫刻は壊してない」

どうやら、予想最高被害額は免れたらしい。

「なら、何を壊した?」

「木から落ちて……足がすく痛いんだけど、骨が折れてるんじやないかなあ、と思つて……」

「この馬鹿つ!　何でそれを早く言わないと!」

「言おうとしたら」

「おー!　私の車を玄関へ回しておけ!　国龍を病院へ連れて行く

破壊費だけでなく、医療費も人並み以上に、かかっていた……。

run ???

「まあ、ロン坊っちゃん、何て痛々しい……。骨折だなんて、お可哀想に」

手の掛かる子供ほど、女には可愛いものらしい。丸々と太ったメイドは、病院から戻つて来た国龍を見て、これ以上はないほどに、勞りを見せた。

それは、実害を受けているラルフとの違いでもあつただろう。「私は医者に儲けをせるために、君をここに置いている訳じゃないんだぞ」

と、煙草を抜いて、撫然と言つ。

「……ごめん」

「旦那様っ！ ロン坊っちゃんがお可哀想で」「やりますよ。こんな小さな子が怪我をして、痛い思いをしていらっしゃる時」

「何故か、ラルフは責められる立場にあるらしい」

手の掛からない大人は、女に取つて、世話をする楽しみがないのだろう。

「理由次第では、可哀想だと認めてやるつ。何故、木に登つた？」

「ラルフの……」

「ん？」

「ラルフの誕生日だから、庭中の木に飾りをつけようと思つて……」

その言葉に、メイドは早くも、うるうると瞳を潤ませている。

ラルフは、といえば、しばらく黙つて国龍を見つめていたが、それから、ぐるり、と背中を向け、

「私の誕生日は一ヶ月も先だ」

「あ、やつぱり覚えてた？」

子供の嘘、というのは、どこか間が抜けているものである。

そして、国龍の嘘は、思いつきり間が抜けていた。

「 言いたくない理由があるのか？」

「別に……。水龍のことを考えてたら、ちよつと泣いちゃって、みつともないから、涙が止まるまで木の上にいよーかな、なんて。ほら、庭から部屋に戻るまでに誰かに見られたらイヤだし、庭に誰か出て来るかも知んないし。で、木に登つたんだけど、枝が霞んで見えて、それで、うつかり足を滑らせちゃって……」

「悪かった。それ以上、言つ必要はない……」

そんなこんなで、四年の歳月が過ぎて行つた。

国龍に取つては覚えなくてはならないことが山ほどある四年間であり、また、水龍のことを考えて、もどかしい思いになる長い歳月であった。

一九九四年、春。

雨季を終えたロサンゼルスは、青いテーブル・クロスを広げたような、美しい空を覗かせていた。

十一月から三月の雨季を除けば、この街は、ほとんど快適な気候が続くのだ。

その陽光の下、緑生す美しい庭の中で、国龍とラルフは、珍しくゆつたりとした朝食の時間を持つていた。

「あんたがティ・オフなんて、珍しいよな」

今ではもうすっかり慣れたテーブルマナーで、簡単な食事を取りながら、国龍は向かいの席へと視線を向けた。

「私にも休みはあるさ」

アメリカ中の新聞を取つているのではないか、と思える何部もの新聞を読みながら、ラルフが応える。

「それが休日の過ごし方かい？」

朝から活字を相手に朝食を取るラルフの姿は、どう見ても仕事中である。

「そうだつたな。君とも少し話をした方がいいかも知れない」

「ぼくは……別にいいけどさ」

「無理をするな。この四年間、弟のことを考えて、さぞ歯痒い思いをしていただろうからな」

新聞を傍らに置いてのその言葉は、全てを見透かすものであった。国龍は黙つて、パンをちぎつた。

アメリカでのし上がるためには、それなりの知識を身につけなくてはならない、と解つても、それが最良で確かな近道だと解つても、その時間がじれつたくて仕方がなかつたのだ。

run ???

自分がいつしている間に、水龍は酷い目に遭つていいのではない  
か。

こんなことをしている間に、水龍を探し出すことが出来るのでは  
ないか。

そんなことを考えたのも、一度や二度では、ない。

そして、アメリカの広さを思い出して、何とか自分を抑えるのだ。  
この広大な大陸の中で、たった一人の密入国者を探すことが、ど  
れほど大変なことであるのかを、自分の胸に言い聞かせて。

「君の美国籍も取れたことだし……」

「一年も前の話だよ。それも、政界のコネだろ

「フツ。利用できるものは利用する。お互い、持ちつ持たれつだ。

今年の夏で、十七だったか？」

「ああ」

「体が出来ていなければ、ショーモデルは無理だな。フォト・ア  
ーチストに会わせてやる。君が気に入られるかどうかまでは保証  
できないが

「本当にそう思つてる訳じや、ないだろ？」

「。大した自信家だ」

本当に自信があったのか、と訊き返されても、国龍は、もちろん  
『YES』と応えていただろう。この四年間、それだけのことをし  
て来たのだ。そして、年月を経た面貌も、その自信を裏付けるよう  
に、さらに美しいものとなつていた。

「ぼくは絶対、のし上がつて見せる……。アメリカ中の人都が、ぼ  
くの顔と名前を覚えるくらいに」

と、格好よく決める。が、ラルフはもう、新聞の続きを読み始め  
ていたりする。

これでは格好よく決めた意味がない。

「おいつ、ぼくと話をするんじやなかつたのかよつ」

国龍は、ムツ、としながら、テーブル越しにラルフの顔を睨みつけた。

「もうしただる」

どうやら、本当に『少し話をする』だけだつたらしい。

それを見て口を開いたのは、丸々と太つたメイドであつた。

「旦那様つ、もう少し親身に坊っちゃんまと話をして上げてくださいましつ」

と、きつい口調で、ラルフを咎める。

「ん、ああ。この記事を読んだら」

「旦那様が大切になさつている本を、留守の間に燃やしてしまいますよ」

「……いい性格だな、ミセス・倩玉<sup>チンドウ</sup>」

「もちろんで」<sup>アゼ</sup>こますとも

「SIGH……」

大きな溜め息が、零れ落ちた。

どうやら、ラルフにも勝てない相手がいるらしい。

これは新しい発見であった。

そして、国龍がその発見を利用するこ<sup>ト</sup>とを思いついたのも、当然の成り行きであつた。丸々と太つたメイド<sup>チンドウ</sup>倩玉<sup>チンドウ</sup>とい<sup>う</sup>のだが

の方を寂しげに見上げ、

「ねエ、倩玉<sup>チンドウ</sup>、ぼく、一度でいいから、ラルフと一緒に出掛けたいな……。ぼく……家族もいないし、とーさんも知らないし……」

と、不憫な境遇を口にする。

倩玉<sup>チンドウ</sup>の瞳が、たちまち潤んだ。

「ええ、ええ、解つておりますとも。私からも旦那様にお願いして差し上げますよ。こんなに愛らしい坊っちゃんを一人にしておくなんて……。どんなに寂しい思いをなさつていたか……。もうお可哀想で、お可哀想で……」

と、ボリュームのある胸の中に、ギューッ、と国龍の頭を抱え込

む。

危うく死にそうになつたので、次からこの手は避けたい。それで  
も……<sup>チシコイ</sup>倩玉の胸の中は柔らかくて、暖かくて、何故か離れたくない  
ような気が、していた。人の肌の暖かさを思い出したせい、だつた  
だろうか。もう何年も恐らく、水龍と離れ離れになつてから、  
ずっと忘れていたものなのだ。

向かいの席では、ラルフが倩玉に責め立てられ、撫然とした顔で、  
国龍の顔を睨んでいる。

もちろん、国龍は氣にもせず、つん、と鼻を澄まして、朝食だけ  
を貪っていた。怒られたら、また倩玉にしがみついて、あの暖かさ  
を感じてもいい、と、思つて、いた。

そして、その日は、朝からさつそく出掛けことになつたのであ  
る。

run ???

「 つたく。新聞を読まないと、一日が始まつた気がしない」  
運転席でブツブツと文句を呟えながら、黒塗りのベンツを運転しているのは、もちろんラルフである。結局、倩玉の言葉には逆らえなかつたのだ。

「 気のせいだよ。ちゃんと一日は始まつてゐるって」  
国龍は、上機嫌で請け負つた。

「 新聞は必ず読め、と君にも言つてあるはずだが

「 早起きして読んだよ」

「 水龍の記事を探しただけだらう?」

「 ……。早くフォト・アーチストに会いに行きたかったんだ」  
視線を落として、国龍は言った。

「 フォト・アーチスト? 今日?」

「 ああ。会わせてくれる、つて言つたじやないか

ラルフの表情が、頭痛を堪えるようになつたことは、言つまでもない。

「 どこの誰がアポも取らずに会つてくれるんだ。しかも、そんな思いつきりの普段着で……。私に恥をかかせる積もりか?」

「 ……」

「 少なくとも、私は君に恥をかかせる積もりはない。待つていれば会わせてやる。向こうから『君を撮りたい』と思わせるような最高の被写体に整えてから……。それが頭の使い方だ。いい顔がくつついていれば相手にしてもらえる、といつものじやない」

「 ……。まだ、頭悪いかな、ぼく」

「 いや……。私が待たせ過ぎたんだろう。君の四年間は、私と違つて随分、長かつただろうからな」

いつも、言つべき言葉を心得ているのだ、彼は。それが、経験によって得たものなのか、生まれついて持つっていた才能であるのかは

判らないが、国龍には信頼できるものであつた。

「……そのフォト・アーチストって、どんな奴なんだ？」

と、気を取り直して、問いかける。

「精神科医から写真家に転向した変わり者だ。まともに行つても、

会えはしない。君のように、自分を売り込みたがっている名もない新人はもとより、話題を欲しがる女優やモデルも」

「傲慢な奴」

「彼に媚びる必要はない。私も君にそんな真似はさせない。傲慢はお互い様だ」

「何でそんな写真家がいいのさ？」

「人間の狂氣を見て来た彼の作品は、他の写真家とは全く違う。君のデビューも、ショッキングでセンセーショナルなものになるだろう」

「へエ……。あんたがついていれば、誰でもアメリカン・ドリームを適えられそうだな。他人の秘書なんかしてないで、自分でやってみたらどうだい？」

「フツ……。私には今のポジションが合っているのさ」

その言葉の意味は、国龍にも何となく解つた。ラルフのように、新聞の隅々まで目を通さなくては気が済まない人間は、裏方の方が性に合つてているのだ。表立つて、くだらないパーティに出席したり、名刺を交換したりしなければならない役職は、時間の無駄遣いのように思えて、満足できないのだろう。悪く言えば、他人を信用していない、とも言えるし、人付き合いが悪い、とも言える。

だが、そんな彼が、自分の時間の全てを使って仕えてもいい、と思つた人物とは、一体、どれほどの人間だというのだろうか……。

「……忙しいのに、随分、ぼくに親切にしてくれるんだな。福州の置屋で客を取つていたガキに」

「……」

「あんたは最初から、普通の客とは違つていた。　いや、判らない。確かにあんたはぼくを助けてくれたけど、あの置屋から連れ出

してくれる気はなかつたはずなんだ。連れ出す気があつたのなら、最初からそうしてゐるだらうし、もつと早く連れ出しに来たはずなんだ。それなのに、あんたは四年も経つてから、ぼくをあそこから連れ出した。もちろん、あんたが忙しい人間で、あんたに取つての四年間は、あつと言つ間の歳月だつてことも判つてゐる。だけど、最初からぼくを連れ出す気がなかつたことは確かなんだ。 何故、ぼくの身請けをしてくれたんだ? 『うつくな?』に大枚叩いてまで、何故、こんなガキ引き取つてくれたんだ? ぼくは、あんたに氣に入られるようなことを何かしたかい? 見ず知らずの人間に、何でこんなに良くしてくれたんだ? 何故、水龍を探すのを手伝つてくれるんだ? もし……もし、ぼくがあの置屋で、廢人になつていたらどうする積もりだつたんだ? そのまま引き取らずに放つておいたかい? 正氣で生きていたから、仕方なく引き取つてくれたのかい? もしそうなら、何のために? ぼくには何も解らない……

国龍は、今まで経つても解けない疑問を、ラルフの前に持ち出した。

run ???

海を見渡せる場所に来て、車が静かに動きを止める。

「もう教えてくれてもいいだろ？」

もう、人の話を理解できない子供ではないのだ。

「……そうだな」

そう言って、ラルフは銜えた煙草に火を点けた。

「一つは、君が持つその瞳に惹かれたからだ。鋭く強かなその瞳に

。あのまま、一生、あの置屋で客を取らせておくのはもつたない  
ないと思つた。だから、チャンスを『えてやつた』  
やはり、婆婆は、国龍を一生あそこに閉じ込めておく積もりだつ  
たらしい。

「それが、『運が良ければ洛杉磯で逢える』っていう、あれかい？

「ああ。　だが、私を頼つて船に乗つたのは、君の弟の方だつた。  
そして、その弟はいつまで経つても姿を見せず……。私もなかなか  
仕事を離れることが出来なかつた」

「……。何故、あの置屋に来たんだ？　子供を抱く趣味があつた訳  
じやないだろ？　あんたは一度もぼくを抱かなかつた。L.Aで暮ら  
すようになつてからも」

青い煙が、車の窓から、外に流れた。

「あそこは、俗な言い方をするなら『組織の陣』だ。女たちが稼い  
だ金は、組織の活動資金になる。君が稼いだ金も　　。私は銀行で  
表の金だけを扱つている訳ではないのさ」

別にそれを聞いても、国龍は驚きもしなかつた。それは、聞くま  
でもなく察していたことであり、今改めて聞くよつなことでもな  
かつたのだ。

「ぼくを部屋に呼んだ理由は？」

国龍は訊いた。

「別に君を指名して呼んだ訳ではない。新しい子供が一人入つたこ

と、その子供に近く客を取らせることは、前以て私の耳にも入っていたが。様子を見に行つたら、？？が気を回して、私に一人、その子供をあてがつてくれた。それが君だ。一度目は私が呼んだんだが」

「……」

「私は、幼い子供が客を取らされているのを見ても、何とも思わない人間なのさ。全てその子任せだ。救つてやりはしない。救い切れない人数だ」

そう語るラルフの表情からは、何の感情も読み取れなかつた。

もし、彼を悪人だ、と言うのなら、少女売春、少年売春の事実を知りながら、可哀想だ、と言うだけの人間は、善人だ、とでもいうのだろうか。新聞を読みながら、口先だけで憫れみをかけ、何もしない連中は、常識を持つている、といえるのだろうか。

その現実を知りながら、それでも自分たちには関係のないことだと、明日には忘れている人間ばかりではないのか。

口先だけで偉そうなことを言いながら、行動を起こさない人間は山ほどいる。そんな人間に、他人を責める資格がある、というのだろうか。

「……あんたはぼくを救つてくれたさ」

たとえ、たつた一人でも、彼は確かに救つてくれたのだ……。

国龍がその写真家と会つたのは、ビバリー・ヒルズの、まさしく城と呼ぶに相応しい、目を瞠るような豪邸で催された、パーティの席であつた。

ハリウッドの西側に隣接する高級住宅街である。

そこは、国龍が知る中でも、贅沢のケタが違つていた。きらびや

かな人々も然り、訳の解らない人々も然り。

それでも、一向に怯む様子もなく、グラスを片手に立つ国龍の姿は、人目を惹きつけるに充分なものであつたに違いない。

人々の視線と囁きも、国龍を垣間見ては、続いていた。

「随分、きれいな子ね……。中国人か日本人みたいだけど

「ついに日本人はハリウッドまで脅かすようになつた、ってか？」

「あの子なら、それも冗談ではないかも知れないわよ」

黒のタキシードと、きれいに撫でつけられた艶やかな黒髪　　その容姿もさることながら、国龍にはどこか独特の雰囲気があつたのだ。それは、過去、というものであつたかも知れないし、目的、と呼べるものであつたかも、知れない。人を恍惚と酔わせる、芥子の夢のような魅惑があつたのだ。特別なことをする訳でもないのに目立ち、そこだけライト・アップされているかのように際立ち、決して人込みに埋もれることなく、仄かな光さえ発して輝いている。

そんな不思議な魅力を持つ少年に、声がかからないはずもないだろう。

run ???

「ハイ。君は新人かい？ ぼくは作る側の人間なんだけど、よければ話をしたいな」

軽薄を繪に描いたような、ハリウッドの人種であった。口調も年齢以上に若々しい。

「最近公開された映画では、『スケープゴート』や『ダーヴィン』なんかがぼくの作品なんだけど。観てくれたかい？」

と、観ていて当然のような口調で、問いかける。

「ああ……。どちらも観た。ちゃちでつまらない映画だった」

「

国龍の言葉に、どよっ、とホールがざわめいた。

後ろでは、ラルフが苦笑のように、皮肉げな唇を歪めている。

男の顔は、引きつっていた。

「ハ……ハハ。子供には少し難しい話だつたかな。登場人物に神秘性を持たせるために、子供が好きそうな人間味を持たせないように書いたからね。あれは全米で話題を独占した最高作なんだよ。一般人が持っているようなモラルやコモン・センスはもちろん、目に見える優しさや哀しさも持たせては

「失礼……。ぼくの言葉が気に障つたのなら、謝ります。ぼくは子供なので、あなたの作品の良さがよく解らない」

国龍は、流れるような口調で、淡々と言つた。

「あ、ああ、そうだろうね。気にしてはいけないさ。子供にはまだ解らないだらうからね」

この場合、取り繕うような男の言葉は、傍目には、余計にみつともないものとしか映らなかつたに違ひない。

そして、国龍が子供でなければ、こうも事なく収まらなかつただろ。加えて、今の言葉で、国龍の存在は、一層、皆の関心の的になつていた。

バルニーで、グラスを傾けていた男も、国龍の姿をじっと見据え、そこから足を踏み出した。

「あの男がフォト・アーチストのステイーブ・F・コーエンだ」

ラルフが小声で耳打ちをした。

男は四五、六歳だろう。クセのある黒髪をオール・バックにし、後ろで一つに結んでいる。精神異常者を見過ぎて来たためか、普通の人間になど面白味も感じない、といった顔付きをしている。

その男の足が、国龍の前で、ピタリ、と止まった。

「年は？」

「ど、周囲の視線など氣にも止めていらない様子で、問いかける。

「……いきなり年を訊かれたのは初めてだ。不躾な人だな、あなたは」

国龍は、不敵な眼差しで、男を見上げた。

「フッ。目を見れば解る。君が年相応の少年でないことも、普通の少年でないことも。私はステイーブ・F・コーエン。写真を撮っている。もちろん、人物だ」

男は先に名前を名乗つた。

「名前は存じていますよ、ミスター・コーエン。ドクター・コーエンの方の名前も。ぼくはロン・ウェイ。肩書きと過去はありますん」

「……。過去はない、か」

「ええ。創つていただけますか、あなたの手で。過去と今、そして、狂氣と逃亡先を。未来は要らない。それはあなたには創れない」

その言葉に、また、ホールがどよめいた。

大の大人と、わずか十六、七歳の少年が、駆け引きのような会話を交わしているのだ。それも、どちらも引かない眼差しで。

何とも言えない空気が漂っていた。

それを破ったのは、一人の華やかな女であった。

「クスクス。可愛らしい坊やだこと。でも、残念ね。ミスター・

「コーホンは私の写真集を撮ることになつてゐるよ。これからすぐ  
にパリへ

「引き受けよ」

それは、コーホンの言葉であった。華やかな女の方には目もくれず、国龍を見据えて、そう言つたのだ。

女はもちろん、目を見開いている。それでも、プライドもあるのだろう。

「その話はパリから戻つてからにしてくださいなくて? あなたも失礼よ、坊や。無名の新人が名声を手に入れたいのは解るけど、ここで仕事の話を持ち出すなんて」

「私はパリへ行くとは言つていない。君の写真集の話も断つたはずだ、ミス・シャロン」

そのコーホンの言葉に、女はさりげなく田を見開いた。

「何ですって……。そんなことが

「私がこのパーティに出席したのは、君のマネージャーに、どうしても一度会つてから決めて欲しい、と泣きつかれたからだ。もちろん、会つたところで、私には君を撮る積もりなどなかつたが」

「君のような有名女優を撮りたがる写真家は、いくらでもいるだろう。私の出る幕はない。失礼するよ。行こうか、ミスター・ウエイ。君もこのパーティを楽しんでいいようだ」

その日のパーティでの出来事は、翌日には業界中に知れ渡り、国龍とコーホンの契約の話も、マスコミが毎日のよつて取り上げるようになつていた……。

run ???

傲慢で自己中心的なフォト・アーチスト、ステイーブ・F・コー  
エンが、国龍を撮りたい、と思った  
理由は、いくつか上げられるだろう。

そして、それは、当人が口にするまでもなく、周囲の人間にも容  
易に知り得ることであつたに違ない  
い。

人を惹きつける何かがあるのだ、国龍には。東洋人独特の神秘性  
や、その美貌はもちろん、普通の少  
年には持ち得ない何かが。

だからこそ、コーインも国龍を撮りたいと思つたのだろう。  
レンズを通して何が浮かび上がつて来るのかを。

妙に大人びた瞳を持つ少年が、何を見つめているのかを。  
夢と絶望、狂氣と安らぎ、逃亡と戦……それらの果てに何がある  
のかを。

もちろんそれは、国龍に取つては、どうでもいいことであつたが。  
「どうだ、撮影の方は？」

夜中近くに帰つて来たラルフが、ネクタイを巻き取りながら、近  
況を訊いた。

「ん……。別に。写真の腕にも、出来栄えにも興味なんかない」  
ニュースを見ながらソファに寝転び、片手間のように、国龍は言  
つた。

「まあ、そんなところだろうな。だが、個展が当たれば、君の  
名は一躍 L.A.中に知れ渡る。コーイン  
の名で売れる訳ではない。君という全く新しい被写体が、ビジュアル・アーチストの腕を凌いでのし上  
がるんだ。楽しみに待つていて。個展が成功して名が上がるの  
はコーインではない。君だ。君という

未知数の存在が、新しい時代を創り上げる。羨望と妬み 形は違つても、君の名を知らない者などない

くなる。そして、それは、君が目的に近づくための、一番の近道だ「何という自信家なのだろうか。彼は、自分の腕を確かなものとして自負しているのだ。

そして、そんな彼の言葉は、誰もがうなずいてしまうほどに、確信に満ちたものであつたに違ない

い。

「楽しみにしてる、つて言われても……。今日なんか、カメラの前で三回も手淫マスターべーション

させられたんだぜ。『人間が一番、人間としての理性を失くす狂気に近い瞬間だ』、とか訳のわかなサイキアリストいことを言つてさ。あいつ、精神科医じやなくて、患者の方だつたんじやないのか？

でなけりや、マッド・シュリンクとか

「……。あー、コホン。別に、何から何まで言つことを聞く必要は、だな……」

「別にヌードだって何だっていいんだけどさ。顔さえ写つてれば」何とも言えない顔のラルフを傍らに、国龍は無関心な口調で、テレビを消した。

国龍も、幼い田は、ラルフのいうサクセス・ストーリーを夢見たことがあつたのだ。

だが、今は、もつと別の目的を持つている。

「でも、ぼくのヌードなら、倩玉チヨウイも喜んで見てくれるかも知んなな。『まあ、ロン坊っちやまもご立派になつて』とか言つて」と、得意げな顔で、太つたメイドの口真似をする。

「あんなア……」

ラルフの疲労がピークに達したことは、言つまでもない。

「まあ、一応、あのマッド・シュリンクの話では芸術作品らしいか

ら。ぼくも悪口を言つ気はないけど、あんたみたいな人間と長く暮らしてると、どうにもこいつもつまらないまがい物にしか見えなくな

る

それは、最高の褒め言葉であったかも、知れない。

そう。コーホンは決して、腕の悪いアーチストではないのだ。  
それどころか、独特的感性を高く評  
価されている最高の芸術家アーチストである。彼の創り上げる作品は批評家を  
黙らせ、人々を呆然と

圧倒させる。

それでも、国龍が冷めた眼で見てしまるのは、やはり、さっきの  
言葉通り、ラルフとの暮らしが長か  
つたせいだろう。

撮影は、以後も順調に進んでいた。  
その順調さとは裏腹に、舞台裏では、  
金を使っての醜い攻防が続いていた。あのパーティでコーホンに写  
真集の契約を断られた女優が、業界  
での顔とコネクションを使って、国龍とコーホンを潰しにかかった  
のだ。また、それだけのことを本当にやつてのける力のある女優であった。もし、今回の個展の計画が、  
国龍とコーエンの一人だけのもの  
であつたなら、二人は個展を開くことも出来ず、どうのマスクコモリ  
も相手にされなくなつていただろ  
う。

だが、そとはならなかつたのだ。

「妨害をやめるですって？ どうこう」となのよ

弱腰になるマネージャーへ向けての、女優の言葉であつた。

「私は顔を潰されたのよ。あんなチビの中国人と、頭のイカれたア  
ーチストに」

「それどころじゃないんだ。政界や実業界から、とんでもない圧力

がかかるつている

「当然でしょ。あの一人が私にしたことは、潰されても仕方のないことだわ」

「逆だ。あの一人ではなく、君とプロダクションにて、だ

「。何ですって……。どういうことなのよ！」

「知るもんかっ。とにかく、これ以上、個展の邪魔をするようなら、潰されるのは君の方だ、という」とだ。あの少年には、どんなにバックがついてい

「そんなことって……」

run ???

ラルフのやることには、いつも微塵の抜かりもなかつた。それを自分の仕事 本来の秘書という仕事と両立しながらやつてているのだから、まさに、神業、としか言えなかつただろう。

そして、そうして頭を使って生きている時が、彼には一番楽しい時なのだ、といふことも、国龍には解つていた。多分、初めて心を許すことが出来た他人が、ラルフ、だつたのだ。

「何か臭うな……。何の匂いなんだ、これは？」

そのラルフの言葉に、

「まだ臭う？ 一回も風呂に入つたんだけどなア……」

クン、と自分の匂いを嗅いで、国龍は言った。

「訊きたくはないが……何をしたんだ？」

今まで遭つて來た被害からすれば、当然の問いかけであつただろう。

「あのマッシュ・ショーリングに、いきなり下水道に連れて行かれてさ。臭いのなんのつて。今日はそこで撮影してたんだよ」

「……ご苦労様」

仕事でついた匂いとなれば、ラルフも文句は言えないらしい。

「個展のタイトル、決まつたよ」

「ほう。 何だつて？」

「Runaway」

『Runaway -逃亡者』

そのタイトルで開催された個展は、『狂氣』というテーマの

貫したテーマの元に出来上がった最高傑作である、として、多くの批評家やジャーナリストたちに高い評価を受けることになった。

もちろん、その一番の話題の中心人物となつたのは、無名の新人モデル、ロン・ウェイである。いや、昨日までの無名新人、ロン・ウェイ。

個展開催日の今日、国龍は、その名をしょーA中に知らしめていた。中には、コーエンがそのモデルを有名にしたのではなく、モデルがコーエンの名を更に高めたのだ、という皮肉屋もいた。いや、それは本当に皮肉だったのだろうか。少なくとも、ラルフに取っては、その批評こそが正当なものであつただろう。

芸術と猥褻の狭間で、モノトーンに彩られる東洋の少年の美しい肢体は、妖しい色香すら含んでいた。

けだるげな表情、達した刹那の白い唇、魔物のような危険な眼差し、狂人の如き凄まじい絶叫と鬱……それからが下水道の美醜の中で、鉄格子の部屋の片隅で、何もない虚無の空間で、暗く透き通つた海の底で、淫靡に、貴く、色づいているのだ。

妖魔　　人はそう呼ぶかも知れない。そんな人外の、そして、幻想的な魅力が、写真の中の国龍には、あつたのだ。

その魅力を前にすれば、男も女も、ほんの少し淫らになつたに違いない。

そして、アーチストたちは、天使のような、と形容される馬鹿馬鹿しい清純派モデルを撮りたくもなくなるだろう。況してや、創りたくも、描きたくもなくなるだろう。

得体の知れない魔と神秘こそ、人々が恐怖し、また、求めて来たものなのだ。

その個展は、ラルフが言つていた通り、ショッキングでセンセーショナルなものとなつていた。

「ミスター・ロン・ウェイ。かなり衝撃的なカットが多いようですが、それに対して抵抗はありませんでしたか？」

会場の熱気に包まれながら、記者たちも興奮気味に質問を飛ばす。

「……別に」

国龍は、終始冷めた口調で受け应えていた。

「確かに、この夏に十七歳になつたばかりでしたよね？　周囲の反応や、あなた自身の心境の変化は？」

「……あつたとしても、あなた方には解らない」

「は？」

「この写真はぼくかも知れないし、ぼくではないかも知れない。この写真を見て、ぼくの狂氣が解る人間がいるとすれば、たつた一人……」

「一人？　それは誰ですか？　やはり、ミスター・コードン？」

「……」

誰にも解るはずなどないのだ。コードンにも批評家にも。解る人間がいるとすれば、八年前に失つた半身、ただ一人……。

「と、年に似合わず無口だナ……。では、ミスター・コーヘン。今回あなたの作品を、芸術ではなくポルノだと中傷する批評家もいるようですが、その点について何か?」

「他人に批評してもらう積もりなどない。撮りたいものを撮つているだけだ。俗物に私の芸術を理解してもらおうとは思わないさ」

「は、はア……。では、あなたご自身では、これを芸術だと?」

「以前、芸術家と精神異常者を同義語として結んだクランケがいた。彼の世界では、芸術家と精神異常者は同じものだと。私も彼の『世界』に同感だ。目の前にある世界しか見えない正常者よりも、全く別の世界を持つている彼らの方が、よほど芸術家の名に相応しい。もし、私が狂っているのであれば、これは間違いなく芸術作品であろうじ、私が正常なら、これは美しく淫らなポルノかも知れん。そして、私は自分を正常だと思ったことなど一度もない。己を正常だと思い込んでいる狂人ほど、愚かな者はいないからな」

「は、はア……」

記者たちも、媚びることをしない一人が相手では、なかなか会話が弾まないらしく、額に冷たい汗を浮かべていた。

### 『逃亡者』

幼い子供が右も左も判らない世界にいきなり飛び出し、海を目指し、大きな夢を持って決意した逃亡。そして、欲望に塗れた大人たちは、その幼子たちの行く手を塞ぎ、閉じ込めた。

そんな哀しい逃亡者の姿は、虚無の空間や鉄格子の部屋、下水道の中に刻まれていた。

なら、海に沈むその姿は そのカットは、何を示すものであつたのだろうか。

「……ぼくは疲れたので、これで」

まだ記者たちの質問が続く中、国龍は蒼冷めた面で立ち上がった。

血の気が引き、息が詰まり、足も心なしかフラついている。

「え、ちょっと待つてくださいよ、ミスター・ロン・ウェイ」

国龍を引き留めようとした記者の言葉は、突然現れた長身の男を見て、ハツ、と止まつた。

言葉が続かない内に、長身の男は、国龍を支えて控室へと翻る。

「お、おい……今の男、黄中元の片腕、ラルフ・リージャないのか……？」

二人の姿が見えなくなると、記者の一人が、呆然としながら口を開いた。

「じゃあ、あの少年のバツクに政財界の大物がついてる、って話も、やつぱり本当だったのか……？」

「下手なことは書けないぜ。こっちの首が飛んじまつ……」

創る側が芸術を志していようと、それを扱う側は、決して芸術だけでは動かないのだ。金が絡まり、コネクションが絡まり、その中、常に人の顔色を窺いながら動いている。

「大丈夫か？」

控室に入り、そう訊いたのは、ラルフであった。国龍をソファに座らせての、問いかけである。

「水龍は……死んだかも知れない」

「……」

「体が弱かつたんだ……。ぼくは、海の広さも知らなかつた。だから、水龍に逃げると言つたんだ。海には魚がいるから、食べるものにも困らない、と思つていた。でも、今は色々なことを知つている。あんな広い海を、水龍が渡れたはずもないんだ。海を渡り切るまで、水龍の体が持つたはずがないんだ。あの写真は……あのカットは、ぼくじゃない。あれは……あれは、水龍の姿が写つているんだ。海に沈んだ水龍の姿が……」

「……。少し休むといい。やつと目的に辿り着いて、精神が不安定になつてゐるんだ」

「違う……。怖いんだ」

「国龍？」

「怖い……。これで水龍が見つかなければ……。水龍がぼくの前に姿を見せなければ、水龍は、もう……。そう思つと、怖くて……不安で……ぼくはどうしたらいいのか解らない……」

国龍は、頭を抱え込むようにして、震える声で呟きを落とした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1187y/>

---

逃亡者

2011年11月27日14時51分発行